
あなたの隣は私でしょ

木村よし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの隣は私でしょ

【Nコード】

N5682D

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

9/30更新 『たく、可愛くねーな』『うつさい！バカ拓也』
幼馴染の拓也が好きな尚美。恋敵の柴山さんに苦戦中の尚美に、やたらとちょっかいを出してくる河本という先輩も現れて……。『おい、マナイト』『胸がなくてわるかったわね！』すれ違いのラブ
コメストーリー

1・美奈にララバイ（前書き）

アクセスしていただき、ありがとうございます！

尚美と拓也と美奈の恋を、暖かく見守ってやってください。
また、批評や感想は木村よしの力になり、励みになります。
なので書き込みもよろしくお願いします

では本編へどうぞ

1・美奈にララバイ

1・美奈にララバイ

「メールしてよね」

「うん」

「電話もしてよ?」

「うん」

目の前で、今にも泣き出してしまいそうな美奈。
そのうつるんだ瞳に映る、同じように泣き出しそうな私。

間も無く発車すると、ホームのアナウンスが流れた。

「困ったことかあったら、すぐに連絡しろよ」

言いながら、美奈に荷物を渡す拓也。

「ありがとう」

美奈は、ゆっくりと電車へと乗り込んだ。

「二人も、また遊びに来てね」

「うん、絶対行くから」

私の言葉に、安心したように美奈は目を少し細めた。

「元気でね」

プシューという音をたてて、電車の扉が閉まった。

美奈と私達を隔てるようにして。

「…美奈！」

走り出す電車を追い掛けようとした私を、拓也が腕を掴んで止めた。

「美奈！」

行ってしまった幼馴染み。

別れの最後は、美奈の優しい笑顔だった。

「いい加減泣き止めよ」

駅の近くにあるファーストフード店。
その禁煙席の隅の席で、私と拓也は向かい合うようにして座っている。

「別に一生会えないとかじゃねえんだからさあ」

言いながら、ケロリとポテトを一本食べる拓也。

「なんであんなにそんなに平気な顔してんのよ」

「なんでって、別に平気なわけじゃ」

「北海道よ?!美奈が北海道に行っちゃったのよ?!」

「そつだな」

「そつだなんて…幼馴染がそんな遠くに行っちゃって寂しくないわけ?!最低!この薄情者!」

一通りけなしてやって、またわーんと子供のように泣き始める。

そんな私を、困ったように見る拓也。

そつ。

私達は幼馴染みなのだ。

私、宮崎尚美と、今日の前でポテトを食べている木高拓也。
そして、北海道へ行ってしまった笹塚美奈。

小学校からいつも一緒で。

それが当たり前だった。

勿論これからもそつだと思ってた。

それなのに。

未来なんて、ほんと何が起こるか分からない。

「尚美」

「…なによ」

「そんなデカイ声で泣いたら目立つ」

「なっ…!!」

に言ってるのよ!って怒鳴ろうとしたけど、周りからの迷惑そうな視線に気が付いて、その言葉をぐっと呑み込んだ。

「尚美」

「もうほっといて」

「ハンカチ」

言われて顔を上げると、拓也が紺のハンカチを差し出した。

「尚美にはまだ俺がいるだろ」

「ふん」

拓也のクサイ言葉を鼻息で吹き飛ばして、ハンカチを受けとる。

「たく。可愛くねえの」

呆れたように少し笑って、拓也はまたポテトに手を伸ばした。

わたしはその言葉に少しイラっとして、拓也のハンカチで思いきり鼻をかんでやった。

2・二人のベクトル

2・二人のベクトル

「え、なんでこうなの？」

「だーかーらー、さっきも言っただろ？このベクトルとこのベクトルが平行だから…」

拓也の示す平行四辺形は、何度もシャーペンでなぞったりしているため、もう原形がわからないくらい真っ黒になっていた。

只今、放課後の教室で昨日返ってきた数学のテストのやり直し中。

教えてもらっているのは私。

教えているのは拓也。

拓也は何故か数学ができる。

あと化学と物理も。

でも、社会とか国語とかできないから、典型的な理系頭なんだ。

私はというと。

拓也とは真逆な文系頭だったりする。

だから数学なんかは大嫌いなわけで。

今数学のテストをやり直しているのも、点数があまりに悪かったため、単位を落とさないように先生が考えてくれた応急処置だった。

「あー！もう、分かんないー！」

「しっかり考えれば分かる」

「てかね、なんでベクトルとかしなきゃいけないわけ？！人生に矢印なんて必要ないでしょ？！」

「尚美。それ、「屁理屈」」

「屁理屈じゃないもん。本当のことだもん」

「ほら、つまんないこと言っていないで。さっさとやる」

「もうやだー。疲れたー」

言いながら、私は机の上に突っ伏した。

「尚美」

「私の人生には、平行四辺形も四面体も必要ないもーん」

なおも起き上がらない私を見て、拓也は呆れたようにため息を吐いた。

「たく。そんなことばっか言ってたら、美奈に愛想つかされるぞ」

「…」

「今は遠くにいるけど、お前も少しは美奈を見習えよ」

「…」

美奈は、数学は得意じゃないっていつも言っていた。

だけど、テストでは理系の子に負けなくらい、いつも上位で。

美奈は、数学が嫌いだとも言っていた。

でも、毎日自分から数学を勉強してて。

何に対しても、美奈は一生懸命だった。

『尚美、一緒に頑張ろう？一生懸命やったら、失敗してもきつと後悔なんかしないと思うの』

私何かを諦めようとする度に、美奈は笑ってそう言ってくれたっけ。

私は、無言で起き上がると、ノートの上に転がっていたシャーペンを手に取った。

「…数学、がんばる」

「ん」

「嫌いだけど」

「知ってるって」

「ものすごく嫌いだけど」

「はいはい」

「美奈に負けないように、頑張ってみる」

私の言葉を聞くと、拓也は優しく笑った。

「よし、じゃあ次の問題やるか」

「あ、ちょっと待って」

拓也もシャーペンを握り直して「さあやるう！」という時に、私のストツプがかかり、拓也は少し不思議そうに顔を傾げた。

「どっしたんだよ？」

「私、がんばる」

「？それはもう分かったって」

「だから、拓也も頑張って」

「は？」

怪訝な顔をする拓也をよそに、私はテストの問題用紙の半分の折り目に沿って、軽くシャーペンで線を引いた。

「ここからここまでは私も考えるから、あとの問題は拓也がやっつてよ」

「…」

ナイスアイディアでしょと笑う私の頭を、拓也がバシコン！と叩いたのは言うまでもない。

3 おとぎ話のようじに

3 おとぎ話のようじに

近くに美味しいケーキ屋さんがあったとかで。

今、女子の間ではちよっぴり人気なその話題。

ま、私も一応女の子なんで？

興味無いと嫌がる拓也を無理矢理その店の前まで引きずってきて、
今に至る。

「やーん！かなり可愛くない?!このお店!」

「…」

目の前の小柄なその店は、まるでおとぎ話に出てくる様な、黄色と
ピンクを基調にした、なんともメルヘンチックな建物だった。

「さ、入るわよ!」

「ちょー！やだし！」

拓也を腕を引いて中に入ろうとした私を、拓也の抵抗が元の場所に引き戻す。

「は？何言ってるのよ、今更」

「今更もくそも、俺の意見は完璧無視だったじゃねえかよ！」

「何よ！人を自己中の言い方して！」

「いや、そのまんまだから」

そのあと少し言い争って、最終的にジャンケンで勝った方の意見を優先することになった。

「負けても文句無しだからね」

「こっちの台詞だっつーの」

お互い、右手に全ての気を集中させる。

「さいしょはグー！」

「さいしょっから！」

ここで綺麗に勝ち負けが決まる。

馬鹿正直に出されたグーと、私のパー。

「尚美！汚えぞ！」

「ふん。なんでもお言いなさい、ミスターピーマン」

まさか今時こんな初歩的な罠に引っ掛かるとは。

ジャンケンが全てグーから始まると思ったら大間違いよ。

「さ、入りましょ？」

私があつちりと拓也の腕を掴んで、店の中へと入った。

「いらっしゃいませえ」

ドアに付けられた鈴がチリンと鳴ると、可愛いらしいメイド風な制服に身を包んだ店員達が一斉に私達に笑顔を向けた。

「二名様ですか？」

「あ、はい」

「店内全席禁煙となっておりますので、ご協力よろしくお願ひします。では、ご案内致しますね」

につこりと愛想の良い店員は、奥の二人用の小さめのテーブルへと私達を案内した。

私達が椅子に座ると、手に持っていたメニューをテーブルの上に広げた。

「こちらが、当店で一番人気のフルーツタルトとお紅茶のセットになります」

店員が指差したページには、色とりどりの果実が並べられた、美味しそうなケーキの写真が。

「じゃあ、私これ下さい」

「俺も」

「フルーツタルトセットお二つでよろしいですか？」

「はい。お願いします」

「かしこまりました」

店員はにっこりと笑うと、メニューを下げて、厨房の方へと戻っていった。

「この店、ちょっと気に入ったかも」

「なによ、いきなり。さっきまであんなに入るの嫌がってたのに」

私の言葉を右耳から左耳へと聞き流し、拓也は厨房の方をやけにに

やけて見ている。

「だつてさー」

その伸びた鼻の下から、だいたい言いたいことは予想がついた。

「この店員…いてててて！」

「お前はどこのスケベオヤジだっ！」

つねりあげた拓也の頬を、さらにみょーんとひっぱってからぱつと手を離れた。

「ーっ！いつてーな、この暴力女！…いや、もはや尚美はもう女じゃないな」

「なんですつてー?!」

また私が拓也の頬をつねりあげようとした時、ケーキと紅茶の乗ったオボンを持った店員が私達のテーブルへと歩いてきた。

「お待たせしました。フルーツタルトセットでございます」

言いながら店員がテーブルの上にフルーツタルトと紅茶を並べていく。

「あの、お客様」

「あ、はい」

いきなり話し掛けられ、少しビックリする。

「お客様はカップルでしょうか？」

「は、はいい?!」

な、なにを言い出すんだ、この店員は?!

「失礼いたしました。実は今、オープン記念として、カップルのお客様限定にこちらのキーホルダーをプレゼントさせて頂いているんです」

店員は言いながらエプロンのポケットから二つのキーホルダーを取り出した。

それはよくある、一つのハートを二つに分けたもので、その真ん中にこの店のロゴが小さく描かれていた。

「あー私達カップルじゃ」

「俺たち恋人同士です」

「え?!」

拓也の言葉に耳を疑う。

「そうですね!では、こちらをどうぞ」

そのキーホルダーが一つずつ前に置かれた。

「ありがとうございます」

爽やかに笑う拓也。

私かというと、まだ今の状況を呑み込めずにいた。

「では、しゅっくじゅっげ」

店員はにっこりと笑うと、また厨房の方へと戻っていった。

「ちょ、ちよつと、拓也！」

「ん？なんだよ？」

「なんだよじゃないわよ！私達カップルじゃ」

「なにお前ごだわっちやっつてんだよ？」

「え？」

「貰えるもん貰ったかなきゃ損だろ」

「…」

なにそれ。

「…けちくせ」

「ん？なんか言ったか？」

「べつにー！」

おもしろそうに笑う拓也。

私は構わずフルーツタルトにフォークを突き刺した。

「こんなことで動揺するなんて。尚美も可愛いところあるじゃん」

そう言いながら私を見て微笑む拓也の顔を、何故か直視できなくて。

そのあと食べたフルーツタルトの味なんて、もうほとんど分からなかった。

4・夢と落書き

4・夢と落書き

三時間目、窓の外からは心地好い光が降り注ぎ、私は窓際が一番後ろの席で、激しく睡魔に襲われていた。

今は日本史で、うるさくしないかぎり怒られないということもあり。

真っ白なノートがやけに眩しくて。

私はゆっくりと机に突っ伏した。

「メールしてよね

「あゝ

「電話もしてよ?」

「わかってるよ」

拓也の手には、大きな荷物。

美奈の目からは、涙が今にも溢れだしてしまいそうだった。

私は何も言うことなく、ただ横からその光景を見ていて。

間も無く発車すると、ホームのアナウンスが流れた。

「困ったことがあったら絶対連絡してね」

「ありがとう。二人もこっちに遊びに来いよな」

言いながら、拓也はゆっくりと電車へと乗り込んだ。

「うん！絶対行くから」

美奈のその言葉に、拓也は安心したように目を細めた。

それを見た美奈がこちらにくるりと向く。

「尚美！尚美も何か言いなよ！もうすぐ拓也遠くに行っちゃうんだよ！」

拓也が遠くに行く。

それがどのようなことなのか、なんとなくだけど分かる。

もう、会えなくなるんだって。

でも、私は何も言うことができなくて。

「尚美！」

美奈の急かす声が耳を貫く。

そんな美奈を、拓也は静かになだめて。

「尚美、美奈と仲良くしろよ」

拓也は優しく私の頭を撫でた。

「じゃあ、元気でな」

プシューという音をたてて、電車の扉が閉まった。

「拓也…」

私の口から出たのは、本当に情けないくらい弱々しいもので。

「拓也…！」

私は必死で、走り出したその電車を追い掛けた。

「尚美！」

後ろから、美奈が呼ぶ声が聞こえる。

それでも私は走り続けて。

「尚美！」

拓也、行かないで。

「尚美…尚美！」

私を、置いていかないで。

「尚美！」

「…尚美…尚美ってば！」

「…ん」

呼ぶ声に目を開けると、前の席の友達が私の腕を軽く揺すっていた。

「もー！起こしても全然起きないんだから。もう四時間目始まるよ」

「え」

慌てて体を起こすと、教壇には日本史の先生ではなく、現国の先生が立っでいて。

チャイム、全然気が付かなかった。

「…あれ？尚美、泣いてるの？」

「え？」

言われて頬を触ると、確かに少し濡れていた。

「どうしたの？怖い夢でも見た？」

「…う、うん。そうみたい」

起こしてくれてありがとうとお礼を言うと、友達は軽く笑って前を向いた。

怖い夢？

今見ていた夢を、はっきりと思い出せない。

でも、なんだかひどく寂しい夢だった気がする。

泣いてしまうくらい、悲しい夢だったような気がする。

私は涙を拭い、現国の授業に集中しようと、広げっぱなしだった日本史のノートを閉じようとした。

が。

「……」

真っ白だったそのノートには、可愛らしいウ　コちゃんが右のページいっぱい大きく描かれていて。

あは。

なに、このウ　コちゃん。

大体犯人は予想がついたが、今は授業中。

黙ってそれを消そうと消ゴムを手にしたとき、ふと視界ギリギリのところ私を見て笑ってる奴の姿が目に入り。

拓也も一番後ろの席で。

私と拓也の間には、二つの机を挟んでいるが。

そんなこと構わずに、私は手に持っていた消ゴムを拓也のおでこに向かって思い切りなげやった。

「いってえ!」

みごとそれが的に命中し、拓也が少し大きめの声を出す。

「木高くん!何騒いでるの?!」

そして黒板を書いていた現国の先生に怒られる拓也。

ふん。いいきみ。

「違っつて先生!尚美が消ゴム投げてきたんだよ!」

「なっ！」

いきなり名前をあげられ、びっくりして立ち上がる。

「拓也がノートにおっきくウ コなんか描くからでしょ?!」

私の言葉に拓也も立ち上がった。

「は?! そっちがグースカ寝てるから悪いんだろ!」

「寝てるからって女の子のノートにウン なんかに描く? 普通! 高校生にもなって恥ずかしい。小学生かっつーの!」

「ふん! 誰が女の子ですか? 女の子はなあ、そんなデツカイ声でウ コって連発したりしません!」

「はあ?! なんですっ」

バン!

大きな音が突然響き、ピタリと喧嘩をやめる拓也と私。

前を見ると、教卓に手をつけて現国の先生がワナワナ震えていた（たぶん怒りで）。

やばいな、こりゃ。

「木高さんに、宮崎さん。二人とも、廊下に立ってなさい」

「…はい」

二人同時に返事の声を絞りだし、ゆっくりと廊下へと出た。

「あーあ、怒られちゃった」

私は壁にもたれながら言った。

「あんなキレなくてもいいのになー、あの先生。だからいくつになっても結婚できないんだよってね」

「先生に聞こえるよー？」

「聞こえねえよ」

笑いながら拓也が言った。

私達以外は誰もいない、静かな廊下。

窓から入ってくる光は、やっぱり心地の良い眩しさで。

なんだかこのまま、拓也となら死んでもいいかな、なんて思った。

「ねえ、拓也」

「ん？」

「さっきはごめんね」

「いいよ。俺も悪かったかもしれないし？」

「うわ、なにそれ」

二人、壁にもたれて笑う。

その時に軽くお互いの手が触れて。

どちらからともなく、手を繋いだ。

それはなんだか懐かしい感覚で。

「手、あつたかい」

まだ少し肌寒い五月。

ずっとここやって一緒にいられたらいいなあなんて。

そんなふうに思った。

5・重低音に酔いながら

5・重低音に酔いながら

「最近遊んでないねー」

という、亜里沙の一言で。

国本亜理沙、中間裕子、仲川俊、西田浩介、拓也、そして私の六人で、放課後カラオケに行くことになった。

実はこのメンバー、結構頻繁に遊んだりするくらい仲良かったりする。

「よっしやー！うたうぜー！」

部屋に案内されるなり、仲川と西田は手際よく曲を予約していく。

「一番！仲川俊！ポルノウたいまーす！」

マイクを手にした仲川のそのおかしな言い方に、亜理沙と裕子が爆笑する。

画面に曲のタイトルが映り、あのアップテンポな重低音の効いたイントロが流れ出す。

久しぶりのカラオケ。

テストも終わって、みんなのテンションは急上昇。

歌いだした仲川の、ひどく狂った音程に、再び全員が声をあげて笑う。

拓也も、ウーロン茶を飲みながら笑っていて。

狭く薄暗い部屋中に響くビートが、心地よく体全身に響いた。

「なーおみ！」

それから全員が何曲か歌って、再び男子たちが175Rを熱唱して

いた時。

不意に隣に座ってきた裕子に話しかけられる。

「ん？」

「尚美はさあ、正直あの三人の男子の中でランクをつけるならどうつける？」

「はあ？」

急におかしな質問をされ、困ったように笑う。

「どづしたのよ、いきなり」

「いいから！」

「えー」

とか話しているうちに、亜理沙も加わり、完全に男子と女子に分かれてしまった。

「んー、三人とも同じようなもんじゃない？」

「そう？私は違うなー」

「うん。私も」

私の答えに異議を唱える二人。

「え、じゃあ二人はどうなのよ」

てか。

なんでクラスの男子の品定めしてるんだろ、私たち。

「えー」

「言ったら尚美絶対怒るもーん」

「なんで私が怒るのよ」

話の流れが、うまくつかめない。

「怒んない？」

「うん」

「絶対、怒んない？」

「怒んないってば」

二人のタイプ聞いて、なんで私が怒るのよ。

「仲川と西田はおいといてー」

「うん」

「木高がやっぱりダントツだねって思うわけ！」

「私もそう思いますー！」

・・・。

「・・・そうっ？」

「そうだよー！」

「木高がうちのクラスでは一番人気なんだよ?!」

そんな話、初めて聞いたんですけど。

「でもさ。拓也あんまり告白とかされてるの見たことないよ」

ラブレターとか、恋愛のれの字も聞いたことが無い。

「もー！尚美は鈍いなー！」

「なにがよ？」

「それ、は！尚美がいるからだよー！」

「はい？」

意味が、わからない。

私がいるから、どうして拓也が告白されないことに繋がるのか。

「皆ね、尚美と木高がデキてるって思っちゃってるわけ」

「はあ!?!」

思わず素っ頓狂な声を上げる。

拓也と私が、デキてるですって……?

「……ありえないからー」

「知ってるよ。うちらは尚美たちが付き合っていないってことは」

「え、じゃあ」

「でも、他のクラスの子たちが知らないだけ」

いや、訂正してください。

「皆の目には、尚美と木高はもはや夫婦として映ってるんだよ」

そんなこと、初めて知ったんですけど。

拓也と私が、そんな風に思われていたなんて。

「なーに話してんの」

歌い終わった男子たちが、私達三人を挟むようにそれぞれ座る。

裕子を真ん中にして座っていた為、私は女子の中では端っこで。

私の隣には、当たり前のように拓也が座った。

「内緒」

亜理沙が言いながらホワイトウォーターのグラスの氷をストローでつつく。

「えー気になるじゃん！」

ちやっかり亜理沙の隣をゲットしているのは仲川。

実は仲川は亜理沙に密かに想いを寄せているようだ。

それを知らないのは亜理沙だけというのが、悲しい現実だったりする。

「尚美、何話してたんだよ」

拓也も少し気になるようだ。

「だからー、内緒って言ったでしょ？」

「教えない。
てか、教えられない。」

「ちえ。ケチくせー」

すねたように唇を尖らせた拓也は、近くにあったウーロン茶を手に取り、ストローをくわえた。

「あ」

ストローをくわえたまま少し考えるように固まった拓也。

「どっしたのよ？」

「…これ、俺のじゃない」

「え？」

「そういえば俺、さっきウーロン茶は飲み干して、メロンソーダ注文したんだっただ」

「…」

ウーロン茶を最初注文したのは、拓也と私の二人だけ。

その後でウーロン茶を注文した人は確かいなかったから…。

「それ私の！」

急いで拓也の手からグラスを取り返す。

「あ…」

目の前には、驚いた拓也の顔があつて。

「た…体調悪いみたいで…悪いけど今日は帰るわ」

私はそう言うなり、財布から千円札を三枚抜き取ると、それをテーブルの上に置いて走って部屋を出た。

私、どうかしてる。

『木高がうちのクラスでは一番人気なんだよ』

二人が、変なこと言うから。

『尚美と木高がデキてるって思っちゃってるわけ』

そんなこと、ありえないのに。

絶対に、ありえないのに。

『尚美と木高はもはや夫婦として映ってるんだよ』

なのにどうして？

なんで私、こんなにドキドキしてるの？

6・蛸は壺の中で

6・蛸は壺の中で

カラオケでのことが気になって、夜にお風呂の中でなんとなく考えた。

拓也と私の関係。

考えたって、どうにかるわけないのに。

そう分かっていても、頭の中はそのことで一杯だったから。

少し熱めのお湯の中で。

白い蒸気に包まれながら。

そしたら知らない間に眠ってしまっただらしくて。

「ぶえっくし！」

自分の大きなくしゃみで目を覚ます。

もうすぐ夏だというのに風邪をひきました。

「鼻水でるっ」

枕元に置いてあるティッシュを一枚とり、ぶーっと思いきり鼻をかむ。

ゴミ箱にそのティッシュを捨てる時に、ふと時計を見ると、もう夕方の四時を軽く過ぎていた。

共働きの母が用意していつてくれた昼食を食べたのが十二時半。その後すぐに寝たから、三時間は寝ていたことになる。

「もう学校終わったかなあ」

段々と長くなる昼に、まだ窓の外は明るくて。

いつもなら、今頃拓也と帰り道を歩いている頃。

今日は、拓也は誰とあの道を歩いているんだろう。

『木高がうちのクラスでは一番人気なんだよ』

昨日の裕子の声が頭をよぎる。

今日は私がない分、拓也の隣はフリーなわけで。

私がかぐうすか寝ている間にも、もしかしたら何人かが拓也にアプローチしていたかもしれない。

「…って何考えてるんだ、私」

やっぱり昨日から、どうも調子がおかしい。

拓也がどんな女の子と仲良くしたって、そんなこと私には関係ないじゃない。

テストもあつたし。

疲れてるのかな、私。

もう一眠りしようと思つて横になりかけたとき、

ピンポーン。

機械的なチャイムの音が私しかいない家の中に響き、誰かの訪問を知らせた。

誰だよ、こんな日に。

出たくないな。

髪はセットしていないからボサボサだし、服だってヨレヨレのロン
グTシャツにジャージっていう、女子高生にあるまじき姿。

ええい、いいや！

無視しよおっと。

どうせ新聞の勧誘か何かでしょ。

そう決心して布団の中に潜り込む。

再び目を閉じた。

が。

ピンポーンピンポーン！

「…」

ピンポーンピンポーンピンポーン！

「…」

何度も鳴らされるチャイム。

めちゃくちゃ怖いんですけど。

ピンポーン。

最後に一回鳴ったのを聞いて、私は仕方なく立ち上がり玄関へと向かった。

つっかけを足にひっかけて、ガチャリとドアを開ける。

「よお」

そこには、ケーキの箱を手にした拓也が、いつもの笑顔で立っていた。

拓也を家に入れ、私の部屋へと案内する。

「ちょっと待ってて。今何か飲み物持ってくるから」

「あーいって。コンビニで午後ティも買ってきたからさ」

ケーキの箱の陰になって見えなかったけど、小さなコンビニの袋もあることに気が付いて。

そんなところにも、拓也の気遣いを感じられた。

でも結局お皿とフォークは取りに行かなきゃ駄目だったけどね。

「てかお前居留守使おうとしただろ」

ケーキをつつきながら拓也が言った。

拓也が買ってきてくれたケーキは、この前一緒に食べに行ったあの店のものだった。

「そ、そんなことないよ」

「出るの遅すぎだし」

「仕方ないでしょ?! こんな格好じゃ」

「ふーん。やっぱり居留守使おうとしたんだ」

勝ち誇ったように、拓也は口の橋を上げる。

「だって…ジャージだし、髪だってボサボサだし」

言いながら、私は所々撥ねたままの髪を撫でつけた。

「ぶっ。尚美でもそおいつの気にするんだ？」

「なっ！どーいう意味よお?!」

「別にいい」

言いながら、拓也は大きく口を開けて、残りのケーキをペロリと呑み込んだ。

「尚美は、どんな格好でも可愛いと思うけど。俺は」

「?!」

いきなりの拓也の言葉に、顔が熱くなるのを感じた。

「尚美茹で蛸」

そんな私を見て、面白そうに笑う拓也。

「なっ！拓也がいきなり変なこと言うからでしょ？！」

とか一応反抗してみるものの、それはなんの効果ももっていなくて。

「っいで！」

ちょっと悔しかったので、ニヤニヤと笑い続ける拓也にデコピンを一発お見舞いしてやった。

「…いつてー。暴力反対！」

おでこを撫でながら涙目で抗議してくる拓也。

「ふん！」

そして、まだ顔の熱は治まらない私。
でもなんとかこの場は上手くやりすごした。

駄目だ私。

完全に拓也にペース狂わされてる。

その後、今日の授業の内容とか課題とか、ありきたりな話を結構して。

気が付くと日がすっかり落ちてしまっていた。

「じゃあそろそろ帰るわ」

言いながら立ち上がった拓也を玄関まで見送る。

拓也の家はすぐ向かいにあるから、もう少し長くいても大丈夫なんだけど。

遅くなりすぎると迷惑をかけるかもしれないという、拓也なりの礼儀なのだ。

ドアを開けると、暗い中で切れかけの街灯がパチパチとしているのがやけに目についた。

「明日は学校行くから」

「おう。やっぱりさ、お前がいねえとつまんねえし」

ドアを開けながらニカツと笑う拓也に、私は本日二度目の茹で蛸になった。

「あ、鍵、ちゃんと閉めとけよ」

「え、あ、う、うん。わかってる!」

私、カミすぎ。

「今日は本当ありがとう。ケーキもすごく美味しかった」

「あ、そうだ」

私の言葉に、拓也は何か思い出したようにまた私に向き直った。

「ケーキ、柴山にも礼言つといて」

「え?」

なんでここで柴山さんの名前が？

「あのケーキ、柴山も一緒に選んでくれたんだよ。だからさ」

え。それって…

「拓也、今日柴山さんと一緒に帰ったの？」

無意識の内に口に出た疑問。

言ってから後悔しても、もう遅い。

「まあな。柴山から誘ってくれたからさ」

全く嫌な素振りを見せない拓也。

「じゃ、また明日な」

何か言う代わりに、私は軽く手を振って拓也を見送った。

ボタンと、やけに大きな音を立てて閉まるドア。

『柴山から誘ってくれたからさ』

普通に話す拓也にとっては、多分それは何でもないこと。

だけど。

私はこの時、何故かすごく嫌な予感がした。

7・牝牛の誘惑

7・牝牛の誘惑

「なーおーみー」

教室に入るやいなや、バッチリメイクの裕子と亜理沙が近寄ってきた。

「昨日風邪だつてえ？大丈夫？」

「ん、まね」

心配そうに聞いてくる亜理沙。

「カラオケでハッスルしすぎたんじゃないのお？」

と、亜理沙とは対称的に茶化す裕子。

一日休んだ学校。

当たり前だけど、一昨日と何ら変わりはない。

拓也とは、下校は一緒にしているけれど、登校は別々の方が多い。

朝の待ち合わせって、何故か上手くいかないのだ。

だから今日も例外ではなく、私は一人で教室に入った。

「隣のクラスに聞いたんだけどさ、今日数学で抜き打ちテストがあるらしいよ」

裕子が思い出したように言う。

「え！まち？！」

「数列の公式チェックらしい」

「最悪っ」

亜理沙も私も。

数学は大嫌いだから悲痛な声をあげた。

何気無い、ありきたりな、いつも通りの会話。
あと少して朝礼が始まる。

一日しか休んでないんだもん。
何も変わってたりなんかしない。

ふと、そんなことを言い聞かせている自分に気付く。
まだ、本調子じゃないのかな。

その時だった。

「えー！拓也くんって超可愛い！」

嫌でも耳に入ってきた、色気付いたあの猫撫で声。

声の方に私たちは顔を向けた。

そこには、拓也と、拓也の腕に抱きつくように腕を絡ませた柴山さんが、楽しそうに話しながら教室に入ってきていた。

「…柴山」

呟いた裕子の声は、何処か毒気を含んでいる。

「そつだ、尚美」

亜理沙が声を落として私を呼んだ。

「昨日さ、尚美いなかったでしょ」

「ん」

「そしたらさ、柴山さんが」

その次は大体予想ができた。

「木高に結構積極的に接近してたんだよね」

亜理沙に、裕子も頷く。

「そーそー。しかも昨日の今日で、もう『拓也くん』だし？」

裕子は言いながら、睨んでいるとも言えるような強い視線を、拓也と柴山さんに送った。

拓也と柴山さんは、まだ二人で楽しそうに話している。

「…そっか」

その時、柴山さんが拓也にギュって抱きついて。それを見た途端何故か胸がチクって痛んだ気がして、思わず目を反らした。

「尚美…」

キーンコーンカーンコーン。

裕子何か言おうとしたが、同時にチャイムが鳴り、私はまた後でとだけ言って、自分の席についた。

「よっ。調子どう？」

ポンと私の頭に手を置いて、拓也が聞いてきた。

今日初めて交す会話。

それは、柴山さんとのよりも後のもので。

頭に置かれた手を、軽く叩いた。

「尚美？」

少し驚いたような拓也の声。

「…調子はどうかって？」

私はゆっくりと拓也の方を向く。

「お陰さまで。もう最悪よ」

多分私は、今物凄く機嫌の悪そうな顔をしてる。

先生が入って来て、拓也は渋々自分の席に戻っていった。

柴山真理子。

ミルクティ色の長い髪を弛く巻いて、真っ赤なリボンで二つに結っているその姿は、まさにプリンセス。

学年一の巨乳とは彼女のこと。

遊んだ男は数知れず。

その大きな胸に泣かされた馬鹿犬どもも数知れずだ。

飯より友よりも男。

柴山さんとは、そういう女の子だ。

そんな彼女を快く思っていない女子は、多分かなりいる。

亜理沙も私も、あまり好きじゃないけど、裕子は好きじゃないなんてもんじゃない。

裕子は、以前彼氏を柴山さんに盗られたことがあるのだ。

ちよつと喧嘩をしている間に、柴山さんは上手く裕子の彼氏を寝盗つたらしい。

まあ彼氏の方も浮気癖があつたのかもしれないけど。

その時の裕子は、もう見ているこっちも辛くなるくらいショックを受けていた。

色を抜いた赤い髪と、常に完璧な化粧という、少し派手めな裕子の外見からは想像もできないほど、彼女はめちゃくちゃ純だったりする。

だから裕子は、別れた後も、なかなか彼氏の携帯のアドレスを削除できなかつたらしい。

これはあくまでも、私の推測に過ぎないけど。

もしかすると、今でもその彼氏を忘れられずにいるのかもしれない。

そして。

柴山さんに対しての恨み。

それはあの時から少しも薄らいでいないってことだけは確か。

裕子と柴山さん。

二人はまさに、犬と猿。

二人の仲が修復する日は、たぶんずっと来ないような気がする。

「尚美」

呼ばれて我に帰ると、音楽の用意を手にした裕子と亜理沙が立っていた。

「朝礼、もう終わってるよ？しかも次、時間割変更で音楽だから移動だし」

「ぼーっとしちゃって。大丈夫？」

前の壁に掛けてある時計を見ると、あと二、三分で一時間目が始まるうとしていた。

「ごめん、先に…」

「拓也くん！急がないと遅刻だよお？」

聞きたくないあの猫撫で声。

拓也くんって言葉にどうしても反応してしまう私は、多分病み上がりだからだと思いたい。

「柴山。別に先に行ってくれていいから。遅刻しちゃ悪いし」

大半が出ていった後の人の少ない教室に、拓也の音が響く。

「嫌だ嫌だあ。マリは拓也くんと行きたいのお」

因みに、マリってのは柴山さんの自称。

自分のことを名前で呼ぶあたり、かなりキテると思うんだけど。

何故かそれに男子は引っ掛かっちゃうんだよね。

だから、ほら。

「拓也くん、マリと一緒に行く？」

「…はいはい」

拓也だって例外じゃないでしょ。

朝礼が始まる前と同じように、柴山さんは拓也の腕に自分の腕を絡ませて、教室から出ていった。

「…尚美」

「ほら、二人とも！私たちも早く音楽室行こう！」

何か言いかけた亜理沙を、私の無駄に明るい声が遮る。

心配そうに顔を見合わず二人の腕を引っ張って、私は教室を出た。

何も気にしていないよって、いつも通りの笑顔を張り付けて。

そうだよ。

実際、拓也と柴山さんが一緒にいたって、そんなこと私には関係ないことじゃない。

『尚美と木高がデキてるって思っちゃってるわけ』

皆、間違ってる。

勘違いもいいところ。

拓也は、私の幼馴染み。

私は、拓也の幼馴染み。

ただそれだけ。

それ以上でも、以下でもない。

拓也と私がデキてるなんて。

そんなこと、あるわけないじゃない。

8・ありがとうパンダ

8・ありがとうパンダ

先生がさよならを言って、皆それぞれ動き出した。

放課後の掃除当番にあたっている人たち以外は、わいわい喋りながら靴箱へと向かう。

いつもと変わらない、平和な放課後。

拓也も私も掃除当番には当たっていなかったから、すんなりと下校できる。

いや。

できる筈だったのに。

「なあ、尚美。今日柴山も一緒にいい？」

これは、靴を履き終わった拓也の言葉。

「は？」

私も脱いだ上履きを靴箱の中にしてしまつて顔をあげると、拓也の隣には、また拓也の腕に抱きつくように自分の腕を絡ませている柴山さんが。

「マリも一緒に帰っていいよね？宮崎さん」

ほんと、憎らしいくらい可愛い笑顔で、柴山さんは言った。

「え…柴山さん、方向逆じゃない？」

「あー、なんか今日は用事で電車乗るんだつて。だから駅まで。な、柴山」

「うん！拓也くんの言う通りです！」

私の必死の抵抗も、いとも簡単にかわされて、もう断るなんてできない状況。

拓也の家も私の家も、駅前の道を真っ直ぐ行った住宅街にあるから、

柴山さんが駅に行くなら断る理由なんてこれっぽっちも無くなるから。

ま、私の感情を除いてですけど。

ていうか、拓也、なに柴山さんの代わりに説明とかしちゃってるわけ?!

本当、男の子ってこれだから嫌だ。

「…いいよ。駅まで一緒に帰ろう」

私は、柴山さんとは目を合わせずにそう言った。

「拓也くんって手大きいよねえ!」

「え、そうか?別に普通だと思うけど…」

「大きいよ！マリの手小さいから余計そう感じちゃうのかな。ほら手貸してみて」

言いながら、柴山さんは拓也の手を取り、その掌と自分の掌を合わせた。

さっきからずっとこの調子。

私の前でイチヤイチャしないで欲しいんですけど。

私はと言つと。

二人の少し後ろを歩いている。

ちょうど三人が二等辺三角形になるような感じ。

まあ言つまでもなく、頂点は私なんですけど。

「あー！見て見て！このクッション超可愛い！」

柴山さんの声で、駅まであと少しの所にある雑貨屋さんの前で立ち止まった。

「学校の近くにこんな可愛いお店があったなんて、マリ全然しらな

「かったあ」

雑貨屋さんのショーウィンドウに張り付いて、そこに飾られているハート型のパッションピンクのクッションに一目惚れした様子の柴山さん。

「ねえ、拓也くん。マリ、ちょっとこのお店の中見ていききたいなあ」

「え…」

少し困ったような声を出したのは私。

この状況から早く解放されたかったのに。

「でも柴山さん、用事…」

言いかけた私を、柴山さんはキッと睨んできた。

余計なこと言わないで。

その視線は、痛いほどそう私に伝えているように思えて。

「柴山が大丈夫なら、俺たちは別に構わないけど。なあ、尚美」

「…うん」

私は渋々頷いた。

「わーい」

私たちの返事を聞くと、さっきの睨みは見間違いだっただのかと思うくらい無邪気な笑顔で、柴山さんは拓也の腕に抱きつきながら店の中へと入っていった。

私も、少し遅れて中に入る。

店内はお世話にも広いとは言えなかった。

狭い通路を挟み込むようにして、商品の飾られている棚が並べられている。

実際、この店に入るのは、私も今回が初めてだった。

早口な何処かの国のロックが流れていて。

所々に設置された鏡には、情けない顔をした横顔が、やっぱり情けなく映った。

「拓也くん、見て。このペンかなり可愛くない？」

「あ、本当だ。気に入ったんなら買えば？柴山に合うと思うし」

「えー本当に？どうしよう。拓也くんがそう言ってくれるんだっから買っちゃおっかなあ」

二人の楽しそうな会話が聞こえてくる度に、私の口からはため息が漏れる。

はあ。

何やってるんだろ、私。

なんで、こんな気分になっちゃうんだろう。

目の前に並べられたパンダのぬいぐるみ。

何故かそのぬいぐるみには立派な眉毛が付けられていて。

「私も間抜けだけど、あんたも相当間抜けね」

ボソリと呟いて、軽くその頭をつついてやった。

てか誰だよ。

ぬいぐるみに眉毛つけようなんて考えた奴。

完全にふざけて作ったんだろうな。

そう思うと、なんだかちよっぴり可哀想になって、次は優しく頭を撫でてあげた。

「尚美、帰るぞ」

ふいに拓也の呼ぶ声がして。

「あ、はい」

私はそのぬいぐるみに「またね」と言って、店の出口へと向かった。

店を出ると、柴山さんの手にはさっきまでは無かった小さな袋が握られていて。

あのペン、買ったんだなって思った。

その後も、店に入る前同様に三角形になって歩いて。

相変わらず、頂点は私のみまだった。

「あ。俺忘れ物したわ」

もう駅って所で、拓也が言った。

「悪いけど、二人とも先帰って」

「え、ちょっと…」

「じゃ、また明日な」

一人完結して、拓也は踵を返して今歩いてきた道を逆方向に走っていった。

残された柴山さんと私。

幸い、もうほとんど駅に着いていたので、あとはさよならだけを言えば良いだけだったから助かった。

でも、やっぱり気まずい。

「し、柴山さんはここから電車だね。私は真っ直ぐだから」

「…」

「じゃあ」

「拓也さんと宮崎さんってさあ」

朝の猫撫で声じゃない、ツンとした声が夕焼け空の下で響いた。

少し驚いて、振り返る。

「付き合ってるって噂あるけど、あれ、デマでしょ？」

「…え？」

突然何を言い出すんだろう、この人は。

「拓也さんと宮崎さん、付き合ってるの？」

表情の無い、柴山さんの顔。

私は、ただ首を横に振る。

その途端、柴山さんの顔は、勝ち誇ったように満面の笑みを浮かべた。

「ほら、やっぱりね！あんなの嘘だと思った。だって、拓也さんと

宮崎さんって、本当笑えるくらい釣り合っていないんだもん」

「…どついう、意味？」

「どついう意味って。そのまんまよ。いい？あなたは拓也くんにはふさわしくない。」

長い影がゆらりと動いて。

二本のそれが、かすかに重なる。

「拓也くんは、私がもらっわ」

そう言うと、柴山さんは徐々に人の増え出した駅の階段を上っていった。

ぼつんと一人残された私。

ゆっくりと、家に向かって歩き出す。

遠くの空には、もういくつかの星が輝き始めていて。

自分が、ひどくちっぽけに思えた。

一日休んだだけ。

たった一日休んだだけで、こんなにも変わってしまったものなのだろうか。

道を歩いているときも。

店の中にいるときも。

私はいつも一人で。

少し後ろから着いていくだけで。

拓也の隣にいるのは、私じゃなくて、いつも柴山さんだった。

拓也がどの女の子と仲良くしようが、私には関係ない。

柴山さんと付き合うことになったって、何とも思わない。

だって。

拓也と私は幼馴染みなんだもん。

だから、全然へっちゃら。

絶対に、へっちゃらだって、思ってたのに。

なのになんで、私今、こんなに苦しいの？

悲しい？

寂しい？

自分でも、よくわからない。

この気持ちは何なのか、全然わからないよ。

「尚美ー！」

「…え？」

突然名前を呼ばれて、ぱっと顔を上げる。

後ろを振り返ると、さっき忘れ物を取りに戻ったはずの拓也が走ってきていた。

「…拓也？」

「はあ…はあ…」

私の前まで来ると、拓也は息を整えながら、少し大きめの袋を私に手渡した。

「え、これ」

「それ…お前に…」

「…？」

「いいから、開けるって」

言われて袋のテープを外すと、中に入っていたのは、

「パンダ…」

あの、眉毛のぬいぐるみ。

間抜けなパンダ。

「なんで…」

「だってお前、店にいるときめちゃくちや気に入ってたじゃん」

幾分落ち着いた拓也は、少し笑ってそう言った。

「最後まで大切そうに撫でてたから、どんなに可愛いぬいぐるみか
って思ったけど。やっぱりお前って趣味悪いのな」

ニカッて、からかうような拓也の笑顔。

ほんと失礼しちゃう。

趣味悪いのはどっちだよ。

あんな牛女に振り回されてたくせに。

「お？怒った？」

おかしそうに笑う拓也に、一発ガツンと言ってやるうと思った。

そう、思ったのに。

「ぬ…いぐる、み…ひっく…あり、が、とお

涙ポロポロ流して。

瞬きする度に、止まらなくて。

ずっと柴山さんと一緒にいて。

私なんて、どうでもいいって思われてるんじゃないかって。

そんなふうに、考えていたから。

道を歩く時も。

お店にいる時も。

あの絡まる二人の腕を見る度に胸がギュッと痛くなって。

だからね。

拓也が私のこともちゃんと見ててくれたことが、涙が出るほど嬉しかったの。

「お、おい、尚美?! そんなに傷つけた? 俺?!」

私の突然の涙を見て慌てる拓也が、少しだけおかしかった。

「ねえ…たく、や」

「ん?」

「拓、也の、隣は…ひっく…もう、少し…空けて、おいて…」

もうほとんど日が落ちて、かすかな橙だけが、私達を照らしていた。

「お前の隣も、まだ空けとけよ？」

拓也は優しく笑って、私の頭にぼんと手をのせた。

ねえ、拓也。

もしかしたら、私。

あんなのことが好きかもしれない。

9. ビターにとろけて

9. ビターにとろけて

時計の針は、どちらもも十二を指そうとしている。

二時間続きの後半。

一階の端にある、少し広めの調理室では、段々と香ばしい良い匂いが広がっていた。

今回の課題。

ふっくらやわらかフルーツマフィン。

因みにネーミングは先生だから。

マフィンが焼きあがるまでに、同じ班の裕子と並んで、せっせと洗い物を片付けていた。

「シンク掃除はしたくないわ」

排水孔に詰まるいくつもの果物の皮を見て、ぼそりと裕子が言う。

「ま、汚いのは男子に任せればいいか」

一班五人、内三人が男子という構成は、先生が決めたもの。

男子だけでは料理がなかなか進まないと、先生が以前漏らしていたのを聞いたことがある。

実際今だって、私の班の男子三人は、何かするわけでもなく、椅子に座って「腹減った」を連呼していた。

あんたらいくつだよっていうツッコミは、グツと我慢。

「そうだね。シンク掃除は男子にやらせよ」

私はスポンジに洗剤を付け足しながら応えた。

最後まではいはしっかり働いてもらいましょ。

「ねえ、尚美」

「ん？」

「マフィンさ、木高にあげんの？」

「…」

裕子はいつも本当に突拍子もない。

シンク掃除からどうやれば拓也に繋がるのか。

「あれ。凶星？」

何も答えられない私を見て、裕子の声が少し弾む。

以前なら、「なんで拓也にあげなきゃなんないのよ」とか言って抵抗してた私だけど、今はそうもいかなかった。

「やっぱりそうなんだ？凶星ど真ん中なんだ？」

顔が熱くなるのを感じる。

そうだよ。

凶星だよ。

凶星ど真ん中だよ！

私は今日出来上がったマフィンを、拓也にも食べてもらおうと思っ
てましたよ。

まあ拓也も、班は違えど今一緒にマフィンを作っているわけで。

それと交換っていうのでもいいかな、なんて考えていたり。

一班十個ずつできるように材料が与えられているから、一人二つず
つマフィンを貰えることになる。

だから、一つは自分で食べて、もう一つを拓也に…なんて。

なんというか、今の私は、自分でも信じられないくらい乙女なのか
もしれない。

あれから数週間経って、梅雨の季節に入った外は、サワサワと雨が降っている。

相変わらず柴山さんは拓也にベッタリで、本気でムカツク時が無いと言えば嘘になるけど。

でも、もう下校は柴山さんと一緒になることは、あれからは一度も無くて。

少々嫌な光景を目にしても、部屋の机の上に飾ってあるあのパンダを見ると、大丈夫だって思えるのだ。

何が大丈夫かは、よくわからないけど。

そして。

一度拓也のことを好きかもしれないと思ってからは、どうしても変に意識してしまう。

無意識のうちに拓也の姿を目で追っていたり。

ノートに拓也と私の相合い傘を書いてみたり…って、これはちょっとベタすぎて自分でも笑えたんだけど。

多分、裕子も亜理沙も、なんとなく私の変化に気付いていると思う。

特に裕子は鋭いから。

だから今だってこうやってからかわれているわけ。

「ぶっ。尚美ったら可愛い！顔真っ赤！」

「も、もう！裕子！からかわないでよお」

ケラケラと笑う裕子と真っ赤な私。

「ごめんごめん。でも、木高きっと言ぶよ」

何を根拠に。

いくら幼馴染みだとは言え、やっぱり多少の不安はある。

同じ物を拓也だつて作つて作る訳だから、断られることは無くても、「なんで交換すんの？」って変な顔をされてしまつかもしれない。

「食べてくれるといいな」

私の作ったマフィンを。

拓也が笑顔で食べてくれるといい。

そんなことを思いながら、全ての食器を洗い終えて、蛇口を止める。

食器を布巾で拭こうと手を伸ばした時、ふと焦臭い臭いが鼻をかすめた。

「おい、なんか焦臭くねえ？」

「うん、俺も思った」

椅子に座っていた男子たちが首を傾げる。

確かに、臭い。

裕子と私はオーブンのある方へと回った。

各班の調理台に一つずつ備え付けられている大きなオーブン。

私達は一旦取り消しボタンを押して、恐る恐るオーブンの扉を開ける。

その途端、モクモクともものすごい煙が立ち上った。

「うわ。ひでえ」

男子の誰かが言った。

あまりの煙に、私達の調理台の周りにゆっくりと人が集まり始める。

鉄板の上に並べられた十個のマフィンは、黒くなった表面がプスプスと音をたてていた。

ていうか、もはやマフィンじゃないよ、こね。

「え、なんで…」

どうしてこんな事になってるの？

「あ」

何か気が付いたように裕子が声をあげた。

「オーブンの設定温度間違ってる」

「え…」

見ると、確かに決められた温度よりも高めの所に印がきていて。

「誰よ、オーブンの設定したの」

裕子は言いながら、男子の方を睨んだ。

「は？俺たちじゃねえし」

「てか、宮崎じゃなかったっけ。オーブン触ってたの」

「へ…?」

私の方を振り返った裕子の顔は、しまった、というふうで。

手が、ガタガタと震えた。

材料混ぜて。

型に流し込んで。

それらを並べた鉄板を、裕子と二人でオーブンの中に入れて。

洗い物をするために流台へと回った裕子を見ながら、私はオーブンのスイッチを入れた。

「…あ…私…」

少しでも視線を動かせば、涙がすぐに溢れてしまいそうで。

「…あの…じゅ、めん…」

私は、五人分のマフィンを、十個ものマフィンを台無しにしてしま

ったんだ。

「うっわ。ひさーん」

何処かから、柴山さんのおかしそうな声が聞こえたような気がした。

「本当に…ごめん…！」

頭を下げる。

もう、頭の中は真っ白だった。

私は、恐る恐る頭を上げてから、流台の方へと戻った。

「尚美…？」

心配そうに裕子が話しかけてくれる。

「あの、そんな、気にしなくていいんだよ？たかが調理実習じゃない。他の班に分けてもらえば大丈夫なんだから」

「ごめん…本当に、ごめんね」

私は、ただ謝ることしかできなくて。

せめてシンク掃除だけでもやろうと思い、腕を捲った。

「尚美…シンク掃除は皆でしょ？だから尚美一人頑張らなくてもいいんだよ？」

その裕子の優しい言葉に、私は静かに首を振る。

「私には、これくらいしかできないから…」

「尚美…」

排水孔の蓋を取り、中に詰ったものを引っ張り出す。

ベロンと出てくる皮の塊は、やっぱり気持ちの良いものでは決してなくて。

中の網も、水で丁寧に洗って。

かすかな生ゴミの臭いが、今の私には丁度良いのかもしれない。

「拓也くん！」

柴山さんの拓也を呼ぶ声が聞こえてきて、思わず顔を上げる。

可愛いエプロンをした柴山さんは、それに負けないくらい可愛い笑顔で、拓也に話しかけていた。

「マリのマフィンあげる！超上手くできたんだあ」

その言葉に、私はギュッと目をつむる。

その二人の姿を、拓也の返事を、感じたくなかったのだ。

拓也にマフィンを食べてもらいたい？

そんなの、ちゃんちゃらおかしい。

なに交換したいか思ってたの、私。

夢見るのも大概にしとけって言ってるやん。

あんな真つ黒焦げの塊なんて、只のゴミじゃない。

いつもはしっかり聞かない調理実習の説明も馬鹿みたいに必死に聞いて、大切なところにはマーカーまでひいたりして。

馬鹿馬鹿、大馬鹿。

温度設定なんか間違えて、何考えてるのよ。

自分だけじゃない。

裕子にも、他の男子にも。

私はものすごく迷惑をかけた。

「なあ。このマフィンどじする？」

「捨てるしかないっしょ。さすがにここまで黒いのは無理」

「だよな。やっぱり捨てるしかないか」

私の焦がしてしまったマフィンを見て話す男子。

私は誰にも聞こえないような小さな声で、ただ「ごめん」だけを繰り返した。

何度謝っても、もう遅い。

私ってなんでこんななんだろう。

頑張れば頑張るほど空回りして、結局は大切な所を抜かしてしまう。

ああ、もう。

最悪。

「……うっ……ひっく……うっ」

情けなすぎで、泣けるくらい。

『うっわ。ひびーん』

あれは、多分マフィンに対してじゃないんだと思う。

『あなたは拓也くんにふさわしくない』

いつかの柴山さんの声が蘇る。

本当にそうだって思う。

何をしても駄目な私なんかより。

柴山さんの方が、ずっと拓也には合っているのかもしれない。

「ちょっと！拓也くん?!」

ふいに聞こえた、信じられない、というような柴山さんの呼び声の後に、

「このマフィン、一個もらっけ」

声がして顔を上げる。

「拓也……」

いつものあの優しい笑顔をした拓也が目の前に立っ

ていて、信じられないことに、手に取った真っ黒なマフィンを、ポイと口の中に放り込んだ。

「…うん。マフィンにしては…かなりビターだな」

拓也は嫌な顔一つせずに、口の中のものを飲み込み。

「ま、食べられないことはないけど」

そう言って笑った。

「なん、で…」

「ん？」

「そんなの、食べなくても…」

柴山さんのマフィンの方が、私なんかのより、ずっと…ずっと…

「俺は、尚美のマフィン貰うのを、楽しみにしてたの」

「…え？」

「上手くできたヤツでも、失敗したヤツでも。お前のマフィンが食いたかったんだよ」

そう言って、ぽんと私の頭に手を置いた拓也。

それがあまりに優しくして。

「…馬鹿じゃん…拓也」

また、泣いちゃうんだよ。

「どうせ俺は馬鹿ですよー」

困ったように笑う、拓也の声。

「…ほんつと馬鹿…病気になっても、知らないんだから」

「ならねえよ」

可愛くないことばかり口から出てきて。

涙はまだ止まらないというのに。

四時間目の終わりを告げるチャイムが、何処か遠くで響く。

「…馬鹿拓也っ」

「馬鹿拓也って…。はいはい、なんですか？」

「ありがとう…！」

泣きながらのこの言葉は、たぶんかなり聞き辛かったと思う。

でも、拓也は優しく目を細めて。

「また作ってくれよな」

そう言った。

外は雨で。

多分明日も雨で。

まだ、シンク掃除も終わってないけど。

だけど帰りに本屋に寄って、お菓子づくりの本でも買ってかえろっかな、なんて。

私はきつと、ものすごく単純だから。

また拓也に、お菓子を作ってあげたいと思った。

10・雨は犬と猫

10・雨は犬と猫

雨雨雨。

昨日も雨。

その前も雨。

今朝は晴れていたのに。

『ようやく梅雨が明け、明日からは久しぶりに、気持ちの良い晴天になるでしょう』

昨日の夕方の天気予報を思い出す。

嘘こけー！

さっきから気持ちの良いくらい、思いっ切り雨降り出しましたがどう？！

先生が前でプリントなどを配布する間、私は窓の外を恨めしく眺めていた。

終礼の始まりのチャイムが鳴るのとはほぼ同時に降り出した雨。

折り畳み傘は常に鞆の中に入れてあるから、何か問題があるわけじゃない。

でも。

こう雨降りばかりが続くと、イライラもするわけで。

帰る直前に降り出せば、そのイライラも倍増するわけで。

私は今、ものすごく機嫌が悪かった。

「尚美、帰ろうぜ」

終礼が終わって、拓也が鞆をもって近寄ってきた。

私は「言われなくても帰る」とボソリと応えて、早足で教室を出て廊下を歩く。

掃除のため少しずつ開けられた、廊下の窓。

外はどんよりと薄暗くて。

廊下に足跡が付くくらい、梅雨の湿度は高かった。

「どっしたんだよ」

「なにが？」

「なんか機嫌悪くね？」

「そお？別にいつも通りだけど」

言葉とは裏腹に、ぶっきらぼうな言い方をする私を見て、拓也は隣でため息をついた。

「なに？」

「は？」

いきなり振り向き、明らかにイラついた声の私。

拓也は怪訝そうに眉をひそめた。

「ため息、ついたじゃない」

「…べっつにー」

言いながら、拓也は私から視線をそらし、窓の方を向いた。

そこで会話が途切れる。

拓也と私の間に漂う、なんとも言えない、不穏な空気。

お互い、口を開こうとしない。

騒がしい放課後の廊下を、無言で歩いた。

靴箱で靴を履き替えて、出口へと向かう。

どしゃ降りの雨。

暗い空。

帰りたくないな。

隣を見ると、拓也はもう鞆から折り畳み傘を取り出していて。

私もチャックを開け、鞆の中に手をつ突っ込んで折り畳み傘を取り出す。

いや。

取り出そうとした。

「あ、あれ……？」

「どうしたんだよ？」

鞆の隅々まで手で探る。

「傘が…あれ…入れてた筈なのに…」

無い。

入ってない。

「は？まさかお前、傘忘れたの？」

「忘れてな…あー！」

言いかけて思い出す。

「部屋に…置いてきた…」

昨日、部屋でペンケースを鞆から出すときに折り畳み傘がどうも邪魔になって。

先に折り畳み傘を鞆から取り出したんだ。

そのまま、机の隅に置いて。

「傘…忘れた…」

「…たく。ドジだなあ」

呆れたというふうに着をすくめる拓也。

ドジ、という言葉に、私はどうも引っ掛かって。

「ドジで悪かったわね」

私は、拓也の方を見ずに言った。

「は？何ムキになって」

「拓也くん…」

言いかけた拓也の言葉を遮って、聞こえてきたのは、もう聞き慣れてしまったあの猫撫で声。

大きな胸を揺らして、柴山さんは拓也の腕に飛び付いた。

「拓也くん、マリね、今超困ってるのお」

上目使いは多分ピカイチ。

まるで私を無視するように、拓也にくっついてる。

「え、なんかあったの？」

悠長に聞き返す拓也。

大体、想像はつく。

「マリね、傘忘れちゃったのお」

可哀想でしょ、と言いながらの泣き真似は、本当に慣れたものだ。

「今日はまた電車乗るから、拓也くん、駅まで傘に入れて？」

「え……」

「お願いあい!!」

拓也はなんとも言えない顔をして、渋々口を開いた。

「あー、柴山、実は今日、尚美も傘忘れちゃったんだよね。で、尚美入れなきゃいけないから、悪いんだけど、他の奴に入れてもらって」

「ごめんな、と謝る拓也。」

「えー！マリは拓也くんの傘に入りたいのお！」

ダダをこねる子供ように、柴山さんは拓也の腕に更に強くしがみついて。

拓也は、「困ったな」と、小さく呟いた。

「柴山さんと帰っていいよ」

ぼつりと、私は前を向いたまま言った。

「…は？何言ってるの？」

拓也が驚いてこちらを向く。

「私、拓也の傘に入れなくても別にいいもん」

「尚美？」

拓也と私のやりとりを、柴山さんは面白そうに見ている。

「てか、拓也の傘なんかに入りたくないし」

言ってしまった後で、自分でも何言ってるのか分からなくなってきた。

最後の一言で、拓也の空気が変わったのがわかった。

後悔しても、もう遅い。

「…そうかよ」

拓也は、折り畳み傘をひろげて、柴山さんの方を向いて。

「柴山、帰ろ。尚美は俺と帰りたくないみたいだし」

静かなその言葉からは、ひしひしと怒りが伝わってくる。

「行くっ」

拓也は、その後ちらりとも私の方を見ずに歩き出した。

「ありがと、宮崎さん。じゃあねえ」

拓也の傘の下で勝ち誇ったような笑顔で手を振った柴山さん。

二人は、激しく降る雨の中、段々と見えなくなった。

「何やってんだ、私」

一人取り残されてしまった私は、とにかく教室に戻ろうと方向を変えた。

もう少し待ってみよう。

雨、止むかもしれないし。

ペタペタとさつき歩いてきた廊下に戻る。

もう大部分の生徒たちは下校していて、ほとんど誰ともすれちがわない。

掃除が終わって閉められた窓を、雨は相変わらず強く打ち付けている。

教室に戻ると、そこにはやっぱり誰もいなくて。

私は一人静かに自分の席に腰を下ろした。

拓也、怒ってたな。

あの静かな怒りを思い出す。

私の言った言葉は、たぶん拓也を傷付けた。

『拓也の傘なんかに入りたくないし』

あんなこと言われて、何とも思わない人なんて、きつといない。

拓也は。

拓也は、嫌な態度をとっていた私を傘に入れてくれるつもりだった。

頼まれなくても。

ちゃんと私のことを考えてくれていた。

それに比べて、私は？

前を向いていた体を、ドアの方に向ける。

一つ机を挟んだその隣が、拓也の席。

たまに目が合うと、嬉しそうに微笑んで。

私が一人でいると、楽しそうな声で名前を呼んでくる。

「なに？」と聞くと、拓也はいつも、「呼んでみただけ」といって笑うの。

拓也の笑顔は、どんな時も明るくて。

でも、私には分かってる。

あれはきっと、拓也なりの気遣いなんだって。

美奈がいなくなってしまうっても、私が寂しくならないようにって。

ゆっくりと椅子から立ち上がり、拓也の席まで歩いていく。

机の端には、以前私の歴史のノートに描かれていたのと同じようなウン　ちゃんが。

それを見て、私は小さく笑った。

椅子を引き、座る。

少しガタガタとなるこの椅子に、拓也は毎日座っているんだ。

誰もいない教室には、雨の音と時計の秒針の音だけが響いていて。

それが妙に大きく感じられた。

拓也に対する自分の気持ちに気が付いてから、私はたまたま疑問に思うことがある。

柴山さんに気に入られている拓也。

最近では、柴山さんのアプローチは更に大胆なものになってきていると感じることが何度もある。

それを見て、やっぱり私は良い気はしない。

ていうか、嫌だ。

だけど。

私は、本当に拓也のことが好きなんだろうか？

幼馴染みとしてだけじゃなく、恋愛対象としても。

柴山さんと拓也が仲良くしているのを見て嫌な気持ちになるのは、単に柴山さんのことが自分の考えている以上に嫌いだからじゃないだろうか？

そう、私は疑問に思うのだ。

だけど。

こうやって、拓也の席に座ってみてわかった。

私はやっぱり、拓也のことが好きなんだって。

普段拓也の座っている椅子に、教科書を開いている机に、私は今触れていて。

それだけで、今こんなにもドキドキしてる。

「好き」

私はそつと呟いて、自分のその言葉にまたドキドキする。

誰もいない、静かな教室。

だけど私の胸の音は、私にしか聞こえない。

「雨、止まないな」

あの時。

拓也が傘に入れてくれようとした、あの時。

柴山さんよりも私を選んでくれて、本当はちょっぴり嬉しかったの。

だけどそんな風を見せたくなくて。

機嫌の悪い、嫌な態度を突き通しちゃった。

私は意地っ張りです。

それは私自身もわかってる。

でも、言うてはいけないことは言うてはいけない。

それなのに、私は拓也に酷いことを言った。

拓也を、傷付けた。

「嫌われちゃったかなあ」

隣はもう少し開けていてくれると言ってくれた拓也。

でも、もしかしたらそこはもう、柴山さんのものになってしまった
かもしれない。

窓の外を見ると、雨足はきつくなるばかり。

一瞬空がピカッと光って。

その後大きな音を立てて、雷が落ちた。

「このまま止まないかもしれない」

雷まで鳴り出して。

もうどうにでもなれって思った。

低い音で轟く空。

また、空が光った。

「尚美！」

雷の落ちる音とほぼ同時に、いきなり教室のドアが開く。

そのガラリという予想外の音に、私は驚いて振り返った。

「拓也…?」

開いたドアのところには、びしょ濡れの拓也が立っていて。

「え…どうして…」

「…心配で、戻ってきたんだよ」

居心地の悪そうに、拓也は私の目を見ずにぶっきらぼうに答えた。

「私を、心配してくれたの?」

「…そうだよ」

「あんな酷いこと言ったのに？」

「お前の口の悪さにはもう慣れた」

最後の一言は少し引っ掛かるけど。

拓也が来てくれたことは、やはり素直に嬉しくて。

「柴山さんは？」

「傘渡して、先に行ってもらった」

「なんで、そこまで」

「だって」

私の言いかけた言葉を、拓也が遮る。

「お前、雷苦手だったろ？」

そう言っつて、拓也は静かに微笑んで。

その優しい笑顔を、私は誰よりもハンサムだと思った。

「…雷なんて、もう恐くないもん」

ほら、また可愛くないこと言っつ。

「あれ？雷鳴る度にへソ押さえて、逃げ惑っつたの何処のどいつだ
「よ

「なっ…！それいつの話よ！」

幼稚園のときの恥ずかしい思い出を出され、拓也をポカポカと叩く。

「痛いっつて」と言いながら笑っつ拓也。

その時、ふと目が合っつて。

私は、叩くのをやめる。

静かに、ただ見つめ合った。

まるで、それ以外の方法を知らないかのように。

どちらも、視線をそらすことなく。

私たちは見つめ合っていて。

このまま、時間が止まるんじゃないかって思った。

「もう下校時刻は過ぎてますよー」

いかなり声をかけられ、二人してビクリとする。

見回りに来た日番の先生は、隣の教室へと歩いていった。

なんとなく居心地が悪くなり、そつと拓也の方を向くと目が合つて。

なんだかおかしくなつて、二人で笑つた。

「帰るか」

「うん」

拓也の言葉に、鞆を取りに自分の席に戻ろつと向きを変えた。

「あ、拓也」

私は、窓の外を見て嬉しくなつた。

「あ」

拓也も、窓の外を見る。

「雨止んだね」

さっきの雨は嘘のように、空は夕日の赤で明るかった。

梅雨が、明けたのだ。

「もうすぐ夏だな」

拓也は嬉しそうにそう言った。

「うん」

私は鞆を持って、拓也の隣まで歩いていき。

拓也の腕に、自分の腕を絡めた。

拓也はそれに少し驚いたように、私の方を向いた。

「尚美？」

「えへ、柴山さんの真似ー」

明るい声とは反対に、私は恥ずかしくて、拓也の方を向くことができなかった。

「濡れるぞ？」

「いいの」

私は、まだグシヨリと冷たい拓也の体に、更にギュッとくっついて。

私にしては、少し大胆だったかななんて思ったり。

「うしー！じゃあこのまま帰るか！」

そう言って、拓也の腕が私の肩に回る。

「やっぱり俺の隣はお前だわ」

そう、言われたような気がした。

ねえ、拓也。

今、拓也は何を思ってる？

拓也に触れている部分が全部熱くて。

私は、死んじやいそうだよ。

私がかもしも拓也のことが好きだと言っても。

拓也はまだ、この腕を離さずにいてくれる？

柴山さんじゃなくて私のために。

ねえ、お願い。

この場所を、置いておいて欲しいの。

11・まな板のダンス

11・まな板のダンス

早いもので、明日から期末テストです。

いつもとあまり変わらない教室の雰囲気。

だけど皆の手にはバッチリ、ノートや参考書が。

うん。

さすが高校二年生。

そろそろ本気で単位を気にする人が出てきたのだ。

期末だしね。

私はというと。

数学では今回も点が取れなさそうだ。

次の授業は音楽。

内職にはもってこいなわけで。

私は生物の教科書でも持って行こうかなと、机の中から教科書を取りだし、パラパラとめくった。

その時、一枚のプリントが入っていることに気が付いて。

恐る恐るその折り畳まれたプリントを開く。

「げ」

先週やった染色体の観察レポート。

提出締め切り、本日の十三時。

只今、十四時七分。

一時間と七分のタイムオーバー。

私は勢い良く椅子から立ち上がり、

「裕子！亜理沙！ちょっと職員室行くから、先に音楽室行って！」

そう言うと、返事を待たずに教室を飛び出した。

二階にある教室から、一階にある職員室へと急ぐ。

何人かの先生と擦れ違っただけで、高校生にもなると、もうさすがに「廊下は走らない」とか注意はされない。

擦れ違う時に軽く会釈をして通り過ぎる。

職員室の前で急停止し、ノックを二回して「失礼します」と言いながらドアを開けた。

生物の先生は、自分の机で何か書類を書いていた。

静かにそこまで歩いて行く。

「岸田先生」

名前を呼ぶと、先生はゆっくりと書類から目を上げ、私の方を向いた。

因みに岸田先生ってのは生物の先生のことね。

「あら、宮崎さん。どうしたの？」

椅子をくるりとこちら向きに回転させた。

「あ、あの、一時までに出さなきゃいけなかったレポート、出すの忘れてて…。もう受け取って貰えないでしょうか？」

「あーそれね。わかりました、次からは気を付けなさいね」

先生は私からプリントを受け取って、優しく笑った。

「ありがとうございます」

「はい」

私は小さくお辞儀をすると、静かに職員室の出口へと向かった。

「あ、宮崎」

名前を呼ばれ振り返る。

職員室の中をキョロキョロと見回すと、音楽の早川先生と目が合った。

先生は椅子に座ったまま私を手招きしている。

そっと机の方を見ると、結構な量のプリントの束が。

嫌だなと思いながら、私は渋々早川先生の所へと歩いた。

「…なんですか」

「いやー良いところに来てくれたよ、宮崎」

そう言いながら笑う早川先生は、私たちの入学と同時に音楽の常任教員となった、まだ若い男前だ。

「このプリント、次の音楽で使うんだけどさ、音楽室まで持って行って配っておいて欲しいんだ」

大体予想はしてたけど、

「えー」

素直に不満を露にする。

「頼んだぞ！宮崎！」

そう言って、先生はその紙束を私に押し付けた。

「きっと今学期の音楽の成績は十だろうな。ね、先生」

「…」

何も答えない先生に思いつ切り笑顔を作ってやって、私は紙束を抱えて職員室から出ていった。

漫画に出てくるみたいに、前が見えなくなるような、そんな厚さではないけれど。

多分新しい楽譜なのだろう、数種類の異なった印刷があることが分かる。

「おも…」

紙というものは一枚や二枚では重さなんて無いものの、こんなにも量になれば結構な重さが有った。

これくらいのプリント、自分で配れつつの。

私は独りぶつぶつ文句を言いながら、三階にある音楽室を目指した。

三階に続く階段を上り終え、あと少しで音楽室。

梅雨が明けてからは、痛いくらい眩しい太陽がサンサンと輝いている。

今日も良い天気だなあなんて思いながら、窓の外に視線を奪われて
いる時だった。

ドン！

「きゃっ」

前から人が歩いて来ていたのに気付かず、その人にぶつかった私は
派手に尻餅をついた。

プリントの束が、ドサリと崩れる。

「…いつてえー」

「あ、ごめんなさい！」

どうやら相手も尻餅をついたようで、同じようにして目の前に男子
が一人座り込んでいた。

長めの茶髪と、耳には骸骨のピアスが一つ。

だらしなく結われたネクタイが、真面目な生徒ではないことを伝えている。

拓也とは正反対だと、その時私は思った。

「ボサツと歩いてんなよな」

「す、すみません」

そいつは小さく舌打ちをすると立ち上がり、ズボンをパツパツとはらった。

うん。

今の舌打ちは聞こえなかったことにしよう。

「おい」

「は、はい」

そいつは、最後に値踏みをするように私を見下ろし、

「次からはもつと前見て歩け。マナイタ」

そう言っつて、私がさっき上つてきた階段を降りて行った。

「ま、まな、いた…？」

その意味が最初よく分からなかったが、自分の口で言ってみて、ようやく理解した。

私はバツと自分の胸を見る。

「む、胸無くて悪かったわねー！」

私は、もう誰もいない階段に向かって叫んでいた。

プリントをなんとか集め終え、音楽室へと向かう。

あの怒りはまだ消えていなかったけど、ぶつちやけ誰かに相談するのも恥ずかしい話なわけで。

チャイムと同時に入った私を見て駆け寄ってきた拓也にも、話すわけにはいかなかった。

「遅かったじゃん」

「…まあね」

「どした？何か嫌なことでもあったか？」

私がプリントを配るのを手伝いながら、拓也は私の顔を覗きこんだ。

「べ、別に…」

いきなり顔が近くなり、思わず顔をそらす。

多分私の顔は、今ものすごく赤い。

そして。

隣でプリントを配る拓也をちらりと見て、思った。

さっきの奴とは、やっぱり正反対だった。

無造作にセットされた髪は、長すぎず短すぎず、色の抜いていない髪が、印象を良い風に引き締めている。

スツと通った鼻筋は、どちらも共通しているような気がするけれど。

目は、違う。

拓也の目は綺麗な二重で、さっきの奴よりも優しい目をしている。

プリントを配り終わったところで早川先生が入ってきて、私は拓也に「ありがとう」と言って席についた。

さっき配ったプリントは『島唄』の楽譜だったらしく。

教室に、あの夏のメロディが静かに響く。

ふと、少し離れた拓也を見た。

楽譜に目を落とし、小さく口を動かしていて。

ちゃんと歌ってるのを、ちょっとかわいいと思ったり。

そのままボーッと拓也の方を見ていると、拓也の前の席の女子が、くるりと拓也の方を向いた。

柴山さんである。

もうお決まりのパターンですけどね。

だけど。

あんな事があつた後の今、私の視線はどうしても柴山さんの胸にいつてしまつわけで。

「柴山さん…大きいなあ…」

ボソリと呟いた私の言葉に、近くの席の人たちがこちらを向いたよ
うな気がしたが、あえて気付かないふりをした。

楽しそうに話している拓也と柴山さん。

二人が仲良くするのは嫌だけど、今はそれよりも、あることが頭の中で不安の渦を作っていた。

拓也はやっぱり、ペチャパイよりも巨乳の方が好きなんだろうか。

私のように胸の小さな女の子なら、多分誰でも一度は不安に思うこと。

駄目。

好きになればなるほど、自分の短所が心配になってくる。

私は、もう何も考えないようにと、心地よく響くピアノの音に、ゆっくりと瞼を下ろした。

「尚美…尚美！」

名前を呼ばれて目を開けると、皆が音楽室から出ていく所だった。

そして、私の横には拓也が立っている。

「拓也…」

「お前…ガン寝しすぎ」

「音楽、もしかしくなくてももう終わった？」

私の質問に、ゆっくりと頷く拓也。

「だから、ほら、もう教室戻るぞ」

拓也の言葉に、私は椅子から腰を上げる。

少し前を歩く拓也を追い掛けるようにして、私は音楽室から出た。

強い日差しで眩しい廊下を、二人並んで歩く。

外はきつとめちゃくちや暑いんだろうななんて考えていると、拓也が口を開いた。

「テスト終わったらさ、どっか遊びに行くか」

「え？」

いきなりの提案に、私は一瞬何て言っているのか分からなかった。

「金曜にテスト終わるだろ？だから土曜とか」

「二人で？」

「そ。二人で！」

ニカリと笑う拓也。

私は、心臓が早くなるのがわかった。

「行く！」

嬉しそうに答える私を見て、拓也はまた笑った。

12・ベッドの下には秘密の花園

12・ベッドの下には秘密の花園

「ねえー、休憩しようよー」

「あと十分で一時間だろ？一時間勉強して、それから休憩って決めたんだから、もう十分頑張れ」

さつきから何度も「休憩」を連発しているのは私。

それを抑えるのが拓也。

今拓也の部屋で、二人で勉強中なのだ。

「もう無理ー！」

「今日の現国のテストはまあまあだったんだろ？じゃあその調子で、明日の数学も頑張れよ」

言いながらまだスラスラと数列の問題をこなしていく拓也に、私はガバリとテーブルに突っ伏した。

「現国と数学は全然違うもーん」

「尚美ならやれる」

「適当なこと言わないでよー」

どう頑張ったって、私が数学で点数がとれないことは、拓也だってよく知ってるはずでしょ。

「帰り道に買ったケーキ食べようよー」

拓也と私は、学校からの帰り道、あのいつものケーキ屋さんでケーキを買った。

「私の洋梨のタルト、めっちゃくちゃ美味しそうだったなあ」

自分の買ったケーキを頭の中に思い描く。
しっとりとしたクッキー生地タルトに、洋梨のコンポートがきらきらと輝いていて。

「あー早く食べたいー!」

私はもはやダダっ子以外の何者でもない。

「お前ねー」

拓也はシャーペンをコトリと机に置くと、問題集から目を上げた。

「ちょっと我慢して頑張るってことできないわけ?」

「もう我慢したもん。充分頑張ったもん!」

「ほお。その割には、ノート綺麗な気がするんですけど」

言われて、体勢を変えてノートをガバリと隠す。

「見間違いです」

計算問題の小問二問しかすすんでいないことは、多分知られるとま

ずい。

「今回の数列はパターンなんだから、しっかりやればそれだけ点数はとれるんだぞ？もう今回のテスト悪くても、やり直しは手伝ってやらないからな」

「えー！拓也がいなきゃ無理！絶対無理！」

「だいたいなあ、お前は」

「あ！」

本日何度目かになる説教を始めようとした拓也の声を遮る。

「…なんだよ？」

いきなり遮られたことに、幾分機嫌をそこねたように眉を寄せる拓也。

私はそれでも得意気に、壁に掛けられているシンプルな時計を指差した。

「もう一時間経ったよー」

勉強開始から一時間十五分。

どうでもいい言い合いに、すっかり時間をとってしまった。

拓也はあと一回ため息をつくど、一階へとケーキと飲み物を取りに行ってくれた。

紅茶でいいかと聞かれたから、多分すぐには戻って来ない。

拓也の部屋で一人きりの私。

物色するには、なかなか良い機会じゃない？

「まさか拓也にかぎって、変なもの持ってないわよねー」

私はよいしょと腰を上げると、

「抜き打ちの持ち物検査よ」

そう言っつて机の方へと歩いた。

スッキリと片付けられた机の上には、薄型のノートパソコンと、数本ペンの入れられたアルミのペン立てが置かれている。

本棚には結構な量の参考書と漫画が。

うん。

机には変なもの無さそう。

そつと机から離れる。

引き出しの中は、ちょっと気が退けたのでやめておいた。

私はぐるりと部屋中を見回した。

机にくつつくように設置された大きな本棚。

紺のシーツのシングルベッドと、その上の天井に貼られたボックストリートボーイズのポスター。

私のよりもシンプルなこの部屋は、やはり男の子のものだからだろうか。

何度も足を踏み入れたことのあるこの部屋には、いつもかすかに拓也の香水の香りがして。

落ち着くといえは落ち着くけど、緊張するといえは緊張する。

ベッドの方を見る。

少し大きめなベッドのシーツには、いくつもの皺が入っていて。

「いつもここで拓也は寝てるんだ……」

考えるだけで、顔が熱くなる。

「……って、何考えてるのよ」

両手で思わず頬を包んだ。

「案外ベッドの下に隠してたりして」

シヨート寸前の思考を変えるためにでた、苦し紛れの言葉。

あまりにベタすぎるか、なんて一人笑いながらベッドの下を覗き込み、一応チエック。

「てかこんな所に隠してあるとか、本気で笑え」

る、が言えなかった。

ベッドの下に積まれた雑誌。

熱かった頭の熱が、サーっと引いていく。

私は、ゆっくりとそれらの雑誌を引きずり出した。

「……」

表紙に書かれた、過激な売り文句。

雑誌を持つ手が、ワナワナと震える。

「ほら、ケーキと紅茶持って来たぞ」

ドアが開き、拓也が入って来た。

テーブルの上におぼんを置く音がしたのと同時に、手にしていたエロ本を拓也に投げ付けた。

「ぎゃっ!」

いきなり飛んで来た雑誌に、拓也は情けない声をあげる。

雑誌は軽く拓也の頭をかすめると、ばさりと床に落ちて。

読みかけの本を開いて伏せるような形で落ちたその雑誌の表紙には、大きな『爆乳』の二文字。

それを見て、拓也の顔色が変わるのがわかった。

「尚、美、なんで、これ」

「なによ、それ」

「なお」

「何ベッドの下とか隠しちゃってんの？ありきたりすぎんのかよー」
のミスターピーマン！」

「落ち着けって」

「もっとましな隠し場所見つからなかったわけ？！せめて引き出しに入れて鍵閉めるとかさあ」

焦る拓也の顔が、情けないことこのうえなかった。

なおも、私は続ける。

「てか。なに、爆乳って？そんなにデカ乳が好きなのわけ？叶姉妹が好きなのわけ？！」

「…いや、叶姉妹は別に関係ないんじゃない？」

「そんなに乳が好きなら牧場行ったら？んでもって死ぬほど牛産め

ば?!」

「尚美、」

「やっぱり拓也も、ペチャパイより大きい方が好きなんだ…」

「何言ってるんだよ」

「…私なんかより、柴山さんの方が、好きなんですしよ…」

「ちょ、とにかく話聞けって」

「…」

「尚美？」

拓也が心配そうに首を傾げる。

怒鳴りまくっていた私がいきなり黙ってしまったから。

不覚にも、自分の言った言葉に泣けてきてしまったのだ。

これが悔し涙なのか悲し涙なのかは、分からないけれど。

「…私だって、好きでマナイトになったわけじゃないもん…」

「え？」

私は拓也の方まで歩いて行くと、さっき投げ付けた『爆乳』雑誌を手に取った。

「…こんなもの」

『爆乳』のコーナーのページを開け、両手でもち、手に力を入れる。

「じゅじゅしてくれるわ…!」

ビリビリという音と共に、巨乳娘がまつぶたつになっていく。
丁度、私には無い胸の谷間あたりで。

「あー!」

拓也はその光景に悲鳴をあげたが、そんなことどうだっていい。

そのページを破り終わると、私はそれらを再び床に落とした。

「ふん！」

拓也の視線は、半分に破かれた巨乳娘から離れなくて。

それがまた私をなんとも言えない感情にした。

「…どうすんだよ」

また涙が溢れそうになった時、拓也が静かに口を開いた。

「はっ」

「…これ、俺のじゃないんだぞ」

「…え？」

思考回路が一瞬にして止まる。

「これ、Cクラスの吉田のなんだよ」

「…」

拓也はまた「どうしよう」と言って、私がめちゃくちやにした雑誌を拾い上げた。

「な、なんで、その吉田くんは拓也にそれを預けたりしたのよ？」

「昨日彼女が部屋に来るとかで、俺に預かって欲しいって頼んで来たんだよ」

もっともなその理由に、私は何て言っただい分からなくて。

拓也がはあと大きなため息をついたので、私は無意識に「ごめんと謝った。」

「そんなこと、全然知らなかったもん…」

「だから話聞けって言ったんだよ」

「わ、私、セロハンテープで張り付ける」

私の言葉に、拓也は力無く笑って。

完全に立場逆転である。

「…ごめん、本当にごめん」

「…まあ、女の子が見るべき物じゃないのに、すぐに見つかるような所に置いてたのも悪かったし」

「でも」

「もういいって。雑誌は、もういいから」

そう言うと、拓也は手に持っていた雑誌と、私が引っ張り出してきた雑誌を、またベッドの下へと戻した。

「たださ」

ベッドの方を向いたまま、拓也は続ける。

「俺は別に、女を体で選んだりとかしないから」

「え？」

「だから、尚美より柴山が好きとか、それは違うから」

「拓也？」

「俺が言いたいのはそれだけ！」

その時くるりと私の方を向いた拓也は、もういつも通りの明るい笑顔で。

「さ、ケーキ食ったらまた数学すんぞ！」

「あ、うん！」

私は素直に従った。

『尚美より柴山が好きとか、それは違うから』

さっきの言葉が頭の中で何度も何度も繰り返される。

まるで、壊れたCDプレイヤーのように。

ほんとだね。

柴山さんより私の方が好き？って、聞いてしまったかったの。

でも、状況が状況だし。

いや、ほんと、今は偉そうなこと言えませんからね。

けど。

うん。

あの言葉は、素直に嬉しかったよ。

私は爆乳じゃないけど。
てか谷間すらないけど。

拓也のこと、大好きです。

13・君の音色に魅せられて

13・君の音色に魅せられて

チャイムが鳴り、一斉にシャーペンを置く。

答案用紙を回収されながら、全員がテストからの解放の喜びの声をあげた。

「終わったー！」

四日間にわたる一学期学期末考査が、たった今終わったのだ。

テストのできや成績表など、過ぎたことは悔やんでも仕方がない。

もう私たちのすぐ目の前までやってきているのは、

「夏休みだー！」

そしてもう一つ。

私には、もっともっと大きなことが。

「尚美」

軽い終礼が済み、それぞれが鞆を手に教室から出ていく中、私を呼ぶ拓也の声が聞こえる。

「拓也」

「明日、何処行きたいか考えたか？」

そう。

明日。

「んー、まだよく分かんないけど、映画とか？」

「映画かー。今何かおもしろいのやってたっけ？」

拓也が手を顎に添えて、最近の話題作を考える。

そんな姿も、絵になるくらいキマっていたりして。

明日、私は拓也とデートをします。

一緒に遊んだりしたことは何度もあるけど。

実は二人でわざわざ出かけるのは、これが初めてだったりする。

「あ、ほら、バイオハザード！今やってなかったっけ？」

「バイオハザード？」

「ほら、ゲームが基になって作られたやつ。なんかかなり面白いらしいよ」

その後拓也は、もう一度「バイオハザード」と呟きながら何かを考えたようである。

頭の中で一段落つくと、拓也は笑顔でOKと言った。

その笑顔を見て、私は更に明日が待ちどおしくなった。

「尚美、もう帰るだろ？」

聞かれて、私が「うん」と答えようとした時、

「宮崎ー！」

いきなり大声で呼ばれて、少し驚く。

見ると、教室の前のドアから、音楽の早川先生が顔を突き出していて。

以前にもあったように、私に向かって手招きをしている。

うん。

行きたくないな。

聞こえなかったふりをしようかと思ったとき、再び大声で名前を呼ばれ、仕方なく拓也に「先に帰つて」とだけ言い、先生の所へと向かった。

「…なんですか」

「いやー、良いところに来てくれたよ、宮崎」

前にも同じような会話をしたなあと思い出す。

相変わらず先生は、悔しいけど男前だった。

「実は音楽室の掃除を少し手伝って欲しいんだ」

はい、きたー。

「え、嫌ですよ。なんで私が。音楽係とかいるじゃないですか」

もっともな不満を明らかにする。

「それが音楽係の子たち、言っても絶対来てくれないんだよ」

困ったように肩を上げる先生。

うちのクラスの音楽係を思い出す。

…確かにギヤルだ。

「でも、だからってなんで私が」

「この前手伝ってくれただろ？その時は本当に助かった。そうやって頼まれてくれるのは、もう宮崎くらいなんだよ」

「でも…」

あの時手伝わなきゃよかったと、後悔してももう遅い。

「頼むよ、宮崎」

顔の前で手を合わせ、必死に頼み込んでくる先生。

そんな姿を見て、断わるなんてこと、私にはさすがに出来なくて。

「…わかりました」

「宮崎！ありがとう！」

途端に先生の顔が輝き、それが少しだけ、ほんの少しだけ、嫌だなという気持ちを軽くしてくれた。

「今から音楽室に行けばいいんですよ？」

「ああ。で、箒で床掃いて黒板拭くだけでいいから」

「先生は、」

「悪いけど今から会議で行かなきゃいけないんだよ。終わったら適当に帰ってくれたらいいから！」

「えっ、ちよっ」

「じゃ！頼んだ！」

言い終わる前に、先生はピューッっていう効果音が聞こえてきそうな勢いで、階段へと走って行ってしまった。

「先生ー！」

一応叫んではみたものの、先生が戻ってくる気配は無い。

逃げたよ。

あの先生。

教室に戻って、拓也にもう一度先に帰っておくように言ってから、私は音楽室へと向った。

防音製の重いドアを開けてみて、驚く。

私の他にもう一人、早川先生に掃除を頼まれた人がいたらしい。

こちらに丁度背を向けるようにして立っていたので、そこにいる男子生徒の顔は分らなかったが、箒をもっていることはちらりと見て取れた。

「あの一、私も掃除で・・・」

そのとき初めて私に気が付いたように、その生徒はくるといちらを向いた。

あ、ほら。

やっぱり箒もってる……って、

「あー！」

顔を見て、私は思わず大声をあげた。

「あ、あんた、あの時の！」

「なんだ、お前か。マナイタ」

箒を手に立っている色の薄い髪をした男は、私を見ておかしそうに口の端を上げた。

そこに立っていたのは。

そう。

テスト前日、丁度プリントを手に音楽室に向う途中正面衝突した、あの、私を『マナイタ』よばわりした不良野郎。

「なんであんたがここにいんのよ」

「見て分かんねえ？掃除しにきたの。胸の貧弱い奴は頭も貧弱いんだな」

鼻で笑いながらのその言葉。

やっぱりムカツク奴だ。

「そ、それくらい分かってるわよ！」

「じゃあ聞くな」

「私が聞きたかったのはそういうことじゃなくて、なんであんたみたいな不良野郎が掃除を引き受けたのかってこと！」

一気に言い終えて、一度大きく息を吸う。

不良野郎は、なんだそんなことか、とでも言うつよつに肩をすくめた。

そして、得意げに、

「んなの、俺が優しいからに決まってるだろうが」

そう言った。

「・・・」

「なんだよ」

「・・・いや、あの、それってシッコめばいいのか、それともスル
ーしたらいいのか」

「な、本当のこと言っただけだろ！」

私の言葉に、顔を赤くする不良野郎。

それがおかしくて、少し笑えた。

「なに笑ってんだマナイタ」

「べっつにー」

まだ笑が止まらない私に、奴は恥ずかしそうに頭を掻いた。

不良野郎は耳まで真っ赤にしている。

ようするにだ。

この不良野郎も身形はこんなだけど、頼まれたら断れない、いわゆるお人好しなのだ。

「箒、あそこのロッカーの中にあるから、笑ってないでさっさと掃除しろ。マナイト」

「はいはい」

私は言われたように箒を取り出してくると、適当な場所を掃き始めた。

サッサツという二本の箒の音が響く。

窓の外からは野球部の掛け声が聞こえてきて。

静かな時間だなあと思った。

「ねえ」

「ん？」

「不良野郎は何年なの？」

「俺？三年。」

「え、最高学年じゃん」

髪型からして同学年か年上だろうと思っていたけど、実際三年と言われると少し驚く。

「それがどうした。てか、お前一年だろ」

「は？！違うし！二年だし！って、あ、それより、受験とか大変じゃない？大丈夫なの、こんな掃除なんかしてて」

「あー、俺推薦だから」

「はい？」

今、『推薦』って言いました？この人。

「ちよ、ごめん。聞き間違いかもしれないけど、今『推薦』って言った？」

「言った」

「え、『推薦』って学校から推薦されるってことだよな？！」

「そつだよ」

私の態度に、眉を寄せる不良野郎。

「……あんだ、学校から『推薦』されんの？」

世も末だっという顔をする私を、不良野郎はまた鼻で笑った。

「お前、俺の実力知らねえだろ？」

「知ってるわけ無いでしょ」

「たった今まともに話したばかりで、あんたの何を知ってるっていうのよ。」

「じゃあねえな。いっちょ聞かせてやるか」

「え、聞かせ？え？」

不良野郎は、少し長めの髪を腕に嵌めていたゴムで一つにまとめ、ピアノの方へと歩いていく。

家には置けないような、立派なグランドピアノ。

その黒い体が、蛍光灯の光を浴びて艶やかに輝いている。

奴は蓋に手を掛け、そっとそれを開けた。

少し黄ばみかけた鍵盤に、優しく指を乗せる。

まるで、愛しむように。

まるで、恋人に触れるかのように。

鍵盤から一瞬指を上げた次の瞬間。

この空間を激しい旋律が埋め尽くした。

この曲を、私は知らない。

体を揺らして鍵盤を叩くこの男を、私は知らない。

それはまさに、ピアニスト以外の何者でもなかった。

縛れるように動くその指先は、決して狂うことなく。

激しく胸を打つその音を、本当にこの男が奏でているのだろうか。

ここが何処なのかが分らなくなる。

外の喧騒は、もはやびたりと止んでしまっているかのよう。

時が進んでいるのか、止まっているのか。

それすらも、分らなくしてしまう音だった。

不協和音のような複雑な和音を叩き、不良野郎はピアノの方に偏っていた体をがばりと戻した。

少しの間、沈黙が流れる。

その間に、全ての感覚が戻ってきて。

「す、すごい」

やっこのことで口から出た私の言葉は、酷く間の抜けたものだった。

「え、今の、本当にあんた？え、すごい、すごい！」

「まあな」

不良野郎は満足そうに髪のコムをはずした。

「音大に入って、将来は留学したいって考えてる」

そう、奴は言った。

蓋を閉めたピアノを、優しく撫でながら。

私は、この不良野郎が推薦されることに、心から納得した。

「よし！掃除も適当にやったことだし、帰るか」

言いながら立ち上がり、不良野郎は鞆を手取る。

「え、黒板は?!」

「お前が来る前にやった」

「あ、え、ありがとう」

ガラリとドアをあけ、一步踏み出した所で、不良野郎は立ち止まった。

「河本聡。将来のビッグピアニストの名前だ。覚えとけ」

「じつもと、さとし・・・」

背を向けたまま放たれた、なんともキザな言葉。

でもそこは、さっきのピアノで目を瞑ってあげることにする。

「あ、私は尚美、宮崎尚美っていうの！」

私が言い終わると、河本はくると私の方を向き、

「ん。じゃあな、マナイタ」

ひらりと手を振ると、廊下を歩いていった。

「もう！マナイタじゃないってばー！」

ぽつんと私一人になった音楽室。

外からは、まだ元気のいい掛け声と笛の音が聞こえる。

河本聡。

未来のビッグピアニスト。

けどやっぱリムカツク奴。

でも。

なんとなく、嫌いじゃないかなって。

そう思えた。

14・モノクロ涙

14・モノクロ涙

朝六時半に目覚ましをセットして。

目覚まし時計は、しっかりと頼んだ通りの時間に私を起こしてくれた。

ピピピピうるさい音を止めるために体を起こす。

ボタンを押してから、うーんと背伸びをして、床に足を付く。

窓の所まで行きカーテンを開けると、外は気持ちのいいほどの晴天だった。

「うん。いい日になりそう」

思わず笑顔が溢れてくる土曜日の早朝。

駅前十時に待ち合わせで、六時半に起きる自分に、少しだけエールを送る。

がんばれ、尚美。

とびきり可愛くなるのよ、尚美。

私は部屋から出て、そっとダイニングへと向かった。

平日は仕事のために朝の早いお父さんとお母さん。

土日くらいは、ゆっくり眠らせてあげたいじゃない。

まだ暗いダイニングに電気を付けた後、裏庭に面している大きな窓の雨戸を開けて、室内に太陽の光を入れた。

お父さんもお母さんもまだ起きていない、私だけの朝。

たまには新鮮でいいかもしれない。

食パンを出してきてオーブントースターで焼き、インスタントのコーヒーをいれる。

テーブルにもっていき、いただきますをしてから、一人で静かに食べた。

まだ涼しい、夏の朝。

うちには朝顔はないけど、たぶん今頃満開なんだろうな。

そんなことを考えながら、コーヒーを飲み終わると、食器はそのままで洗面所へと向った。

顔を洗って、歯を磨いて。

ほんでもってちょっと眉毛を整えて。

うん。

なかなかいい感じ。

鏡の中でニコツと笑顔をつくっている私は、傍から見ればかなり気色の悪い人だろうけど。

今日は、特別なんです。

その後また静かに部屋に戻ると、お父さんとお母さんが起きてくる音がして。

時計を見ると、八時を少し回ったところで。

あの有意義な朝の時に、結構時間をとってしまったと後悔する。

私は少し急いで、クローゼットを開けて服を取り出した。

中間テストが終わった後にお母さんに買ってもらった、白いワンピース。

キャミソールのような形になっていて、丈の短いデニムジャケットを上から羽織るやつ。

ありきたりだけど、どうしても欲しくて。

実は、このワンピースを着るのは今日が初めて。

パジャマを脱ぎ捨て、慎重にチャックを下ろし体を通す。

姿見をちらりと見ると、やっぱり可愛いなって満足してみて。

チャックを上げたあと、デニムジャケットに腕を通した。

うん。

服はこれでよし。

肩に付くか付かないか程度の短い髪は、残念ながら巻いたりできないから、白と黒のチエックのカチューシャを付けた。

普段は化粧なんてしないけれど、アイライナーを引き、上瞼にベージュのシャドウを、涙袋のところに白のシャドウを軽く乗せて。

最後に桜色のリップを引いて完成。

おそるおそる姿見の前に立ってみる。

「おー」

思わず自分に賞賛の声をあげた。

慣れていないにしては、目の前の鏡の中には乙女な女の子が立って
いて。

「拓也、可愛いって言うてくれるかな」

逞しい想像力に、筋肉がだらしなく緩む。

時計を見ると九時二十分。

うん。

丁度良い時間じゃない。

私はお気に入りのシルバーの鞆をダンスの中から取り出した。

ううん。

取り出そうとした。

「・・・ない」

以前にも同じようなことがあったかもしれないけれど、そこは敢え

て気にしない。

今は目の前の現実だけ。

「え、なんで、なんで無いのお？」

少しずつヒステリックになりながら、ダンスの中をかき回す。

けど、やっぱり無くて。

こうなったら、もう助けを借りるしかない。

「お母さーん！私の銀色の鞆知らない?!」

私はドスドス走って、ダイニングへと向った。

ドアを開けると、お父さんもお母さんもゆっくりと朝食タイムで。

「尚美の鞆？あーどっかで見たわね」

「その『どっか』ってどこよ?..!」

「そんなの忘れたわよ。ちょっと待って、一緒に探してあげるから食べかけのトーストをパン皿に戻すと、お母さんは椅子から立ち上がった。」

客間、廊下、トイレ、洗面所。

あらゆる場所をひっかき回す。

途中からはお父さんも加わり。

ヒステリックを起こす私に、お母さんが軽くキレて。

家族みんなで、家中を探し回った。

それから二十分。

ようやく見つかった私の鞆ちゃん、私の部屋の、さっき脱ぎ散らした。パジャマの下。

灯台下暗しってね。

時計を見ると、十時五分前。

「あー！遅刻だー！」

結局こうなる。

「走っていきなさい、走って！」

鞆がパジャマの下から出てきたこと、かなり機嫌が悪くなったお母さんは、私の背中をバシんと叩いて家から送り出した。

お気に入りのバレエシューズをはいて、走る走る走る。

でも、汗はかかないように気をつけながら。

化粧が崩れるのは、やっぱり嫌だもん。

駅前につくと、大きな時計台のところに背を凭れさせ、拓也は立っていた。

「拓也！」

私の声で気が付いて、拓也もゆっくりと私の方へと歩いてくる。

「ごめんね、遅くなっちゃって」

大きな時計台の長い針は、もうすぐ四を指そうとしていた。

息を整えながら、少し乱れた髪も整える。

幸い、カチューシャのおかげでそこまで乱れてはいなかったけど。

「尚美、お前遅えよ」

「だからごめんって！」

笑いながら言う拓也を見て、ホッと一息。

怒ってはいないみたい。

「尚美」

「ん？」

じっと、私を見る拓也。

「どうしたの？」

きつと、いつもと違って乙女な私に少しはびっくりしてくれているのかもしれない。

可愛いねって、そう言ってくれるかもしれない。

「何か、付いてる？」

「応言ってみる。」

にっこりと、女の子らしい笑顔を作って。

「やっぱり」

「えっ？」

「イモムシついてんぞ、肩に」

・・・はい？

おそろおそろ肩の方を見る。

そこには、可愛い可愛い灰色のイモムシちゃん。

「ぎゃー！取って取って取って！」

さっきの女の子らしい笑顔は何処へやら。

「あーとってやるから暴れんな！」

結局いつもと変わらない始まり。

待ちに待った土曜日のデート。

滑り出しは最悪です。

イモムシがとれて一段落ついた拓也と私は、早速映画館へと向った。

この辺りでは一番大きな映画館。

収容可能人数もかなりのものというのが売りなのだけけど。

チケット売り場には既にものすごく長い列。

「なあ、どうする」

その光景を目にした拓也が言った。

この映画館は、今では珍しく指定席じゃないから、長い間列に並んで待たなければならぬ。

「どしどし。やめとく。」

「・・・そうだな。ゲーセンでもいくか」

そう言ってくるりと方向を変える拓也。

私もそれについていく。

「あの、ごめんね？」

「え、なんだよ、急に」

いきなり謝る私に、拓也は不思議そうに首を傾げた。

そろそろ十一時ということもあり、だんだんと街が賑やかになっていく。

「あー、だって」

「あれー、拓也くんじゃなーい？」

突然のその声に、同時に後ろを振り返る拓也と私。

聞きなれた猫なで声。

そこには、私服姿の柴山さんが大きな紙袋を手に立っていた。

「こんな所で会うなんて超ぐうぜーん！」

そういつと柴山さんは嬉しそうに拓也の腕に抱きついた。

「よう。柴山、買い物？」

もう慣れてしまったのか、それに対して全く動揺しない拓也。

会いたくない奴に会ってしまった。

「うん！どうしても欲しいキャミがあってね！拓也くんは、なんで宮崎さんなんかといるの？」

宮崎さん『なんか』っていうのがどうもひっかかるけど、敢えて何も言わない。

「今から二人でゲーセン行くんだよ」

「いいな！マリも拓也くんと遊びたい！」

言いながら更に強く体を引っ付ける柴山さん。

柴山さんが現れた時点で予想はしていたけれど、流れは最悪な方向へと向っている気がする。

「ねえ、マリ今から暇なの。一緒に遊んじゃだめ？拓也くん」

くるりとした大きな瞳で拓也を見上げる柴山さんは、やっぱりすくく可愛くて。

そのときに、ふと柴山さんも白のワンピースを着ていることに気付く。

私と同じようにデニムジャケットをひっかけて。

その格好はほとんど私と同じだったけれど、私よりもスタイルがよくて、髪もふわふわに巻いて、顔も可愛い柴山さんは、鏡の中の私なんかよりずっとずっと魅力的だった。

『拓也さんと宮崎さんって、本当笑えるくらい釣り合っていないだもん』

いつかの、柴山さんの言葉が頭の中に響く。

『あなたは拓也くんにはふさわしくない』

真っ白なワンピース。

こんなの、着てこなきゃよかった。

「あー、柴山、い」

「あのさ！」

何かを言いかけた拓也を私の声が遮る。

そんな私に驚いたように、拓也と柴山は同時にこちらを見た。

「あの、ね、私、急用思い出しちゃったんだよね」

「は？」

「だから、ゲーセンには拓也と柴山さん二人で行ってよ」

私の言葉に、明らかに怪訝な顔をする拓也。

「尚美、お前何言って」

「じゃ、そついうことだからー！ごめんね！」

「おい！」

呼び止める拓也の声を背中に感じて、私は家の方へと走り出す。

その場を離れるとき、ちらりと笑った柴山さんの顔が見えた気がした。

走って走って。

朝より走って。

「……きゃっ！」

そしてこけた。

「いつ、た……」

受身を取り損ねて、見事に膝で着地。

ゆっくりと体を起こすと、膝からは真っ赤な血がじわじわと滲み出てきて。

初めて着たワンピースも、小さな砂利に引っかかって、見事に破れてしまった。

「もうやだ・・・」

眩きながら、乱暴にカチューシャを取る。

ほら。

もうこれで、いつもの私。

がんばってお洒落なんかするから。

慣れない化粧なんかするから。

拓也に可愛いつて思ってもらいたいなんて、そんな無謀なこと考えるから。

「かつこわる・・・」

地べたに座り込んだまま動けない。

足も痛いし、手も痛いし。

心も、すっごく痛い。

「うっ、うづ……」

全てが台無し。

泣いてしまった今、化粧だって台無し。

黒い涙が、ぼたりと白いワンピースにしみをつくった。

この日を、すごく楽しみにしてた。

いい日になればいいって、本当にそう思ってて。

だけど、こうしてしまったのは、全部私の所為。

靴が見つからなかったことから始まって、遅刻したことで映画は見

れなくて、拓也を柴山さんに渡して終る。

ぜんぶ、ぜーんぶ、私の所為。

とことん、私って馬鹿だなんて思う。

「あー、もう、馬鹿馬鹿馬鹿」

「誰が馬鹿だよ」

いきなり声がして、びっくりしながらも振り返る。

「え、なんで」

「何俺置いて先に帰ってんだよ。てか、お前に急用とかねえだろ、万年暇人野郎」

拓也は言いながら私の前にまわり、しゃがみこんだ。

「おまえ、こけた？」

「……うん」

「どんくせーな。たく。膝、血出てんじゃねえかよ」

痛々しそうに私の膝を見ると、拓也は私の手をとり、ゆっくりと立たせた。

「歩けるか？」

「うん、たぶん」

拓也の腕が、支えるように私の肩に回る。

「顔もぐしゃぐしゃだし」

「……いぬこ」

「とにかく一旦帰って、消毒してこい。それからまた何処でも行けばいい」

「え？」

拓也を見ると、優しく笑っていて。

「さっき俺が柴山に断ろうとしたのにお前は。俺言っただろ？二人で出かけようって」

「……でも」

私の小さな声に、拓也はぎゅっと私を更に引き寄せた。

「映画が見れなかったのはお前の所為じゃない。柴山に会ったのだから、ただタイミングが悪かっただけだ」

「拓也」

「それから！」

今まで私の方を向いていた拓也は、顔を前に戻して言った。

「今日のお前、まあ、か、か、可愛かったから！」

その途端拓也は、耳まで真っ赤にして。

それを見た私も、顔が熱くなるのを感じて。

「……ありがとう」

そう言うのが精一杯だった。

もうすぐお昼の外は、影はほとんど無くて。

小さな公園からは、蝉がうるさく鳴いている。

肩に回された手は、まだそのまま。

そこから伝わる熱は、やっぱり私を溶かしてしまいそうにして。

痛む膝と、涙で乾いた顔。

周りから見ると悲惨な私。

だけど。

今私は、きっと誰よりも幸せ。

15・王子と乞食

15・王子と乞食

昨日終業式が終って、さあ夏休み！っていききたいところだけど。

高校生には夏期補習ってのがあるんですねー。

早速今日から一週間、みっちりと一日三時間ずつ予定が組まれていて。

私は今、うるさい蝉の鳴き声の中、痛い日差しをつなじに受けて、のっそのっそと歩いている。

「あつー」

空には大きな入道雲。

輝く太陽は休むことを知らず。

お日様大好き向日葵ちゃんも、この暑さに完璧に干上がっていた。

一人文句を呟く私。

それも蝉にかき消されて、自分自身にも聞こえたか聞こえなかったかわからない。

まだ八時というこの時間、影は自身の半分の長さも映してはいなかった。

「なーおーみ！」

呼ばれて声のした方を振り返ると、裕子と亜理紗が仲良く駆け寄ってきた。

「おー、おはよー」

「おはよ。今日も暑いねー」

言いながらマリーちゃんのうちわをぱたぱたと動かす亜理紗。

ぱっちりメイクの裕子とは正反対に、亜理紗は軽くリップを引いているだけ。

色の抜いていない真っ黒な長い髪に、赤い唇がよく映えていた。

「今日一時間目なんだっけ？」

「生物ー」

喋りながら歩き出す。

裕子を真ん中に、三人並んで。

「生物って・・・補習までして何やんだよお」

「遺伝だって」

「げー」

勉強全般が嫌いな裕子は、本気で嫌そうな顔をする。

「遺伝とか。私全然わかんないんですけど」

「苦手な人多いって先生言ってたもんね」

私たちは全員文系だから、理科とか数学は得意じゃない。

裕子だけじゃなくて、私だって遺伝なんてわからないわよ。

組み換え価とか判性遺伝とか。

文系だから用語を覚えるのは得意ですけどね。

じつとりと制服が背中に張り付くのを感じながら、大きく開けられた校門を抜ける。

うねる様な坂を上り、グラウンドの端に沿ったピロティーを真っ直ぐ行くと、校舎に続く造りになっていて。

朝から練習している野球部やテニス部を横目に、私たちはピロティ

―を歩いていた。

「あの」

後ろから声がして、三人同時にぴたりと止まる。

一瞬私たちが呼び止められたのかどうか分らなかったけど、前に続くピロティ―には誰もいなかったから、私たちで合ってるんだと確信した。

振り返ると、背のスラリと男子が一人立っていて。

「ごめん、急に呼び止めたりして」

謝りながらゆっくり歩いてくる彼に、私は見覚えが無かった。

「あ、いえ、別に大丈夫ですけど」

裕子が不思議そうに応える。

亜理紗も大きな目を不安そうに揺らしていて。

どうやらこの二人も知らないらしい。

「あの、どうしたんですか？」

亜理紗が恐る恐る口を開いた。

さっきまで動かしていたうちわは、今はもつぴたりと止まっている。

「あ、うん、あのさ・・・」

何かを言おうとして口ごもるその彼を、私は少し観察してみた。

長い前髪はセンターで分けられ、後ろは遊ばせるように軽く跳ねさせている。

金に近いほど色の抜かれた髪は、太陽に眩しかったけれど、色白とということもあり、どちらかといえば爽やかな印象を与える。

目は切れ長で綺麗な形をしていて、鼻筋もスラリと通っている。

うん。

言うこと無しのイケメンである。

「あの
」

決心したかのように、さっきより少し力が入った声を出して、その彼は裕子でも私でもなく、亜理紗の方を向いた。

「俺、河本祐樹っていうんだ」

いきなりの自己紹介に少し驚いたような亜理紗は、黙って続きを待った。

河本。

どこかで聞いたような苗字だ。

河本祐樹は、強い眼差しとは逆に、優しい口調で続けた。

「もしよければ、俺と付き合ってもらえないかな」

それはとても紳士的で。

サマになっているとしか言いよつゝの無い告白シーンだった。

当然、亜理紗は途端に白い頬を真っ赤に染めて。

口をパクパクしている。

こつゝというのが、乙女っていうんだろつね。

「お、祐樹じゃーん」

聞き覚えのある声が河本祐樹の後ろから聞こえてきて、全員がそちらを向いた。

そこには。

「あ、河本！」

未来のビッグピアニストこと河本聡と、もう一人知らないヤンキー

が、手を振ってたらだらと歩いてきていて。

「よう。また会ったな、マナイタ」

私に気が付いた河本聡は、面白そうに笑いながら言った。

「マナイタじゃないってば！」

言い返してみても、気が付く。

河本祐樹。

河本聡。

苗字が同じなのは、こいつのことだったんだ。

「お？まさかお前、いつも話してたカワイ子ちゃんにとうとう声をかけた？」

河本聡の隣にいたヤンキーは、楽しみを見付けたかのように目を輝かせて亜理沙を見た。

「おー！マジに可愛い！」

短い眉と襟足だけ伸ばした黒い髪が、どことなく威圧感を感じさせて。

河本聡と親しそうなところを見ると、この二人も三年だと分かった。

楽しそうに笑うそのヤンキーとは反対に、亜理沙は怖いのかかすかに震えている。

「光太、怖がってるだろ」

それに気付いた河本祐樹先輩は、静かにそいつに言って、亜理沙に「ごめんね」と謝った。

「悪い悪い。俺、田中光太つつの。よろしく」

ニカッと笑った顔は何処か幼いようにも感じられて、亜理沙も少し安心したようだった。

「で、そのカワイコちゃんの名前は何て言うんだよ」

「あ、わ、私、国本亜理沙っていいいます」

河本聡の言葉に、慌てて亜理沙は名前を言った。

「亜理沙ちゃんっていうんだ？可愛いね」

河本祐樹先輩はそう言って優しく微笑んで。

その綺麗な笑顔に、亜理沙はまた頬を赤く染めた。

「てか尚美、その茶髪の人と知り合いなの？」

何気無く聞いてきた裕子。

早い話の流れに、イマイチ着いていけないようだ。

「うーん、知り合いついていうかなんというか」

「河本聡っつーの。ヨロシク」

私と出会った時とは違って、河本聡は裕子にニッコリと笑ってみせた。

…裕子は胸が大きいからだろうか。

「え、河本？」

名前を聞いて、裕子は河本聡と河本祐樹先輩を交互に見た。

「俺たち、苗字一緒なんだ」

でも兄弟とかじゃないから、と付け加える河本祐樹先輩。

「ややこしいから下の名前で呼んでくれていいよ」

河本聡と河本祐樹。

うん。

確かにややこしい。

「あのさ、もしよかったらメアド交換しない？」

「え？」

「駄目かな？」

不安そうに目を細める祐樹先輩に亜理沙はブンブンと頭を横に振ると、スカートのポケットからミニイのストラップが付いたピンクの携帯を取り出した。

「あ、ずっりー！」

それを見て、光太先輩もポケットから携帯を引っ張り出す。

「もう皆で交換しちゃおーぜ！」

携帯を開きながらのその提案に、祐樹先輩は明らかに嫌そうな顔をしたけど、結局その後私達も携帯を出してメールアドレスを交換した。

河本聡、河本祐樹、田中光太。

新規登録された三人のアドレス。

まさか聡とメールアドレスを交換するとは思ってもよらなかった。

それぞれが操作し終えて携帯を閉じた時、丁度予令のチャイムが鳴った。

「ごめんね、時間とらせちゃって」

「あ、いえ」

また連絡するねと言うと、三人は三年の靴箱の方へと歩いて行った。

その時、聡は私に「またな、マナイタ」と言っ

た。多分携帯のアドレス帳にも『マナイタ』で登録されてるな、と思った。

「ねえ」

教室に向かう途中の廊下で、裕子に肩を叩かれる。

「ん？」

「亜理沙見て」

言われて亜理沙の方を見ると、完全に上の空だった。

ぽーっと明後日の方向を見ている。

「あー、自分の世界に入っちゃってるね」

「どじするっ？」

「何が？」

別に自分の世界に入ってしまったって、あんなに素敵な人に告白され

ただだから仕方ないんじゃないかな。

「尚美、忘れたの？」

「え？」

私の間抜けな反応に、裕子は呆れたというように眉を寄せた。

「仲川よ」

「仲川？」

仲川。

仲川俊。

同じクラスで結構仲の良い男子で、拓也ともよくつるんでいる。

その仲川がどうしたと、

「あ」

思い出した重要な事実。

「仲川、ピンチじゃん…」

私の言葉に、こくりと頷く裕子。

亜理沙は相変わらず上の空。

「どっしょっしょ…」

あの仲川の脳天気な顔が頭に浮かぶ。

祐樹先輩にはとうてい敵いつこない。

仲川は、ずっと亜理沙のことが好きだったんだ。

もんもんとした気持ちで、二年B組の教室に辿り着く。

さあ、本当にどうするべきか…。

「はい、ではキムタクのモノマネをするホリやりまーす」

ドアを開けた途端、まさに問題の仲川俊の、やっぱりノーテンキな声が耳に入ってきた。

「『ちよ、ちよお、待てよお』」

「似てねーぞー」

「ぎゃはは」

入り口付近の席で、大して上手くないモノマネを見て笑っているのは、拓也と西田。

亜理紗が先にふらりふらりと教室に入っていく、その後裕子と私が続く。

その馬鹿三人の傍まで行くと、裕子は、コマネチをし出した仲川の頭に、バフン！と糞をぶつけた。

「いってー!」

「はよー、中間、宮崎」

「尚美、今日遅かったじゃん」

痛みに床にしゃがみこむ仲川は軽く無視し、拓也と西田が声をかけた。

「まあ、ちょっとね」

「てか、仲川」

「なんだよー、この凶暴女」

まだうつすらと目に涙を溜めて、仲川はゆっくりと立ち上がる。

「いいこと教えてあげる」

「いいことだー?」

まだおふざけ半分だった仲川を、裕子はギロリと睨んだ。

その視線に、仲川だけじゃなく、拓也も西田も真剣な面持ちになる。

「な、なんだよ」

「あんだ、亜理沙のこと好きでしょ」

突然の裕子の言葉に、仲川は途端に顔を真っ赤にした。

「ななななななな、何言ってるんだよ?!」

噛みまくった上に、最後は声が裏返る。

ほんと、分りやすい奴だ。

「早くしないと、亜理紗とられちゃうわよ」

慌てふためく仲川にかまうことなく、裕子は強い眼差しのまま言った。

それは、なんの感情もこもっていないような冷たい響きをもっていたけど、それが余計に、裕子の真剣さを表していた。

「は？」

裕子の言葉に、ぴたりと動きを止める仲川。

「てか……国本は？」

拓也の言葉に、裕子は何も言わずに亜理紗のほうを見た。

その視線の先を追うようにして、男子三人も亜理紗の方を向く。

やっぱりぼーっとしたまま、亜理紗は席に座っていて。

「なんか、様子いつもと違うくない？」

西田が言った。

「三年の河本祐樹。亜理紗、その人にさっき告られたのよ」

裕子の言葉の後、一瞬の沈黙。

「え、えー?!」

それを破ったのは、やっぱり仲川で。

「う、嘘だろ?!まじ?!悪い冗談だろ?!」

「こんな冗談言ってどーすんのよ、ばーか」

裕子の応えに、仲川の顔色がサーっと変わっていく。

「因みに、あんたなんかより何百倍もかっこいいから。祐樹先輩」

「ゆ、裕子」

更に追い討ちをかける裕子に、さすがに仲川が可哀想になった。

「俺、どーしたらいいんだよお」

がっくりと項垂れる仲川に、私たち四人は顔を見合わせて。

拓也は、困ったように腕を組んだ。

「仲川、元気出せよ」

「そーだよ、元気出して」

これは、拓也と私の言葉。

「てか、お前に国本は高嶺の花すぎたんだって」

「今度は自分と釣り合う子を好きになればいいじゃん」

これは、西田と裕子の言葉。

その言葉に、更にダメージを受ける仲川。

「ちょ、ちょっと二人とも！」

「仲川、できるかぎり俺たちも協力するからさ！」

必死な拓也と私の声に、仲川はゆっくりと顔を上げた。

「木高、宮崎……」

うつすらと目に涙を溜めている仲川は、まるでチワワのくーちゃんみたいで。

私は思わず、祐樹先輩の方が男らしいな、とってしまったのだっ
た。

16・星のない空

16・星のない空

今テレビの中では、人気のお笑い芸人たちがコントを繰り広げていた。

お笑いには結構好きだから、夕飯を食べ終わった後は、決まって家族三人でテレビを見る。

つくづく仲の良い家族だと思うよ、ほんと。

食後のコーヒーを片手に、ゆったりとソファーに包まれて。

これを至福の時と言わず、いつをそう言うのだろうか。

何組めかのグループが終って、番組が一旦CMに入った時だった。

「尚美、なんか鳴ってない？」

「え？」

お母さんに肩を叩かれて、テレビの音量を少し下げろ。

確かに、何か鳴っている。

更に音量を下げて耳を澄ませると、それは私の携帯の着メロで。

「私の携帯だ」

そう言うと私は、まだ少しコーヒーの残っているマグカップをテーブルの上に置いて、駆け足で自分の部屋へと向った。

切れる一歩手前だったと思う。

部屋の電気のスイッチを叩くようにして押した後、机の上で音楽を流しながら震えている携帯を引っつかんだ。

「もしもしー！」

『もしもし』

聞こえてきたのは、拓也じゃない男の声。

ディスプレイを見る前に通話ボタンを押したため、それが誰のものなのかがわからない。

「え、あの」

『俺だよ、俺』

「え？」

『だから俺だって』

戸惑う私と、苛ついてくる男。

『俺』でわかるんだっいたら、声聞いた瞬間に誰かわかるっつーの。

「すみません、間違いじゃ、」

『あー！だーかーらー！俺！聡！河本聡だよ！』

いきなり大きくなった相手の声に、反応し切れなかった頭がグワンと痛んだ。

聡。

河本聡。

「あ、あんたか！」

これは顔と名前が一致した瞬間。

頭の中に、今朝も見たあのムカツク顔が浮かんだ。

『わかるのおせーし。マナイト』

「はあ？あんたがさっさと名乗らないから悪いんでしょーが！」

『表示されるだろ。まさかお前の携帯にはディスプレイないのかよ。』

簡単携帯かよ』

「ディスプレイくらいあります！カメラもついてます！」

私の反応を鼻で笑う聡。

うん。やっぱり夜も超むかつく。

「で、何の用よ」

ベッドの上にはぼっと座る。

丁度ベッドの頭の上にある窓のカーテンを少し開けてみたけれど、星はやっぱり一つも見えなかった。

『今週の日曜』

聡の音が、静かに響く。

『ドリームパークいくから』

「・・・はい？」

意味が分らない。

というか、付いていけない。

『だから予定いれんなよ』

さも当たり前のように聡は言った。

「ちょっとちょっと！待ってよ！どっついうことよ？！」

じゃあそついうことだから的なることを言って電話を切るうとした聡を、私は急いで引き止める。

『は？分かんねえのかよ。だから、日曜に』

「いや、だから、なんでそついうことになってるの？！」

明らかにズレた答えをかえしてくる聡に、心のなかで「このスカタ

ン！」って罵っておく。

もっともな説明を再び求める私は、気付けば携帯を両手で包むようにして持っていた。

『……うつせえなあ。んなのどーでもいーだろ。とにかく、決まったんだから。絶対来い。来なきゃシバく』

とても女の子にいうような台詞じゃないような気がするんですけど。

ていうか、全然説明になってないんですけど？！

「でも、まあ私は置いておいて、裕子や亜理沙が予定空いてるかどうか分らないじゃん」

『あー、それなら多分大丈夫』

確信のあるような、そんな言い方。

「なんでそんなことが分るのよ」

『だって、一時間くらい前に、祐樹と光太がメール送って確認したから』

あ、なるほど。

確認したんだったら、本当に二人の予定は大丈夫・・・って、

「なんで私にはその確認のメールがこなかったのよ?!」

おかしいよね？

普通におかしいよね?!

『あ？だってお前、どうせ暇だろ?』

間違っただけとは言っていないそんなその言い方に。

まず根本的に何か間違っているような気がするけど。

予定が空いているのは事実なので、結局何も言い返せない。

『じゃ、それだけだから。また詳しいことはメール送るわ』

そう言うと、ばいばいも言わずに奴はブチリと電話を切りやがった。

今聞こえてくるのは、プープーという無機質な機械音だけ。

電話を耳から離し、さっきの強引な約束にため息を吐きながら、私は携帯の電源ボタンを押した。

ドリームパーク。

それは、結構大きなテーマパークで。

サンダーというジェットコースターと、大きな観覧車が人気らしい。

決まってしまった、日曜日の約束。

今日は木曜だから、あと三日後。

これは多分、ものすごく仲川を不利にする。

亜理紗と祐樹先輩が親しい仲になってしまえば、きっと仲川に勝ち目は無い。

さあ、どうするべきか。

手を顎に添えて、視線を上を巡らせる。

何か、いい案はないか。

仲川にできる、祐樹先輩に負けない素晴らしいこと。

必死で考えていると、ふと机の本棚にささっていた一冊の本に目がつまった。

その背に指を掛け、両隣の本が落ちてこないように押さえながらゆっくりと引つ張り出す。

少し埃のかぶったそれは、でもまだ新品同様に綺麗で。

表紙には、可愛い沢山のフェルトマスコットの写真。

初めてでも簡単！作ろう！簡単マスコット

表紙に書かれた大きな文字。

それを見た瞬間、私は思わず喜びの声をあげた。

「これだー！」

これなら、仲川にだってできる。

祐樹先輩に勝るかどうかは分らないけど。

フェルトでマスコットを作るくらいなら、きっと絶対上手いく！

私は早速その本を鞆に入れて、明日にでも裕子たちに相談してみようと思った。

17・フェルトでガンバ（前書き）

更新遅くなってしまいましたすみません。

17・フェルトでガンバ

17・フェルトでガンバ

「おはよー尚美」

ガラリと教室の扉を開けると、拓也と、拓也の席に集まっていた裕子と西田が私に朝の挨拶を投げ掛けてきた。

私は鞆を持ったままそこへ走り寄る。

「おはよ！仲川は？！」

朝から顔を輝かせる私に、三人は不思議そうに顔を見合わせた。

「あそこにいるけど」

拓也が視線を向けた先に、仲川の席があり。

仲川はそこで、机の上に死んでいるように伏せていた。

「来てからずっとあの調子。亜理沙のことにかなりダメージ受けてるっぽい」

少し心配そうに言う裕子。

西田も仲川の方を向くと心配そうにため息を吐いた。

「それなんだけど、いい考えがあるの！ちょっとこれ見て！」

私は一人明るい声を出して鞆からあの本を取り出した。

机の上に置くと、三人ともが「何これ」というような顔をする。

「フェルトで、マスコット…?」

「そう！これなら簡単だから仲川でも出来そうだし、ナイスアイディアだと思わない?!」

私の声を聞きながら、裕子はパラパラと本を捲って。

「まさか、仲川がマスコット作って、それで亜理沙を釣ろつって考
えじゃないでしょうね?」

「え? そうだけど」

予想外に冷めた裕子の反応に、首を傾げる。

私の返答に、裕子は「やっぱりね」と言いながら本を机の上に戻し
た。

「いい? 恋愛未経験者」

裕子がぴしりと指を立てる。

「な、なによ」

恋愛未経験者という言い方に少し引っかかるけど、そこは敢えて触
れないでおこう。

「今どきね、手作りのマスコットなんかで、誰もときめいたりしま
せん」

裕子の指摘に、思わず反論する。

「そ、そんなことないよ！」

「そんなことあるの！逆にウザいって思う子の方が多いんじゃない？」

私たちのやりとりを、拓也と西田は静かに見ている。

巻き込まれたくないという考えが、黙っていてもよく伝わってきた。

「で、でも！裕子、ちょっと思い出してみよう」

「なにをよ？」

眉を寄せる裕子。

「この前、私と裕子と亜理紗の三人で、告白されるならどんな風がいいかって、結構盛り上がったときあったでしょ？」

それはたぶん今から二週間ほど前。

期末テストが終わった辺りだったような気がする。

「あー、あつたわね。そんなことも」

「その時、亜理紗なんて言ってたか覚えてる？」

「えー、亜理紗が？えつと・・・」

思い出そうと目を瞑る裕子にかまわず、私は話を続けた。

「亜理紗あの時、『ドラマみたいなのがいい』って、そう言ってた」

「ドラマ・・・あーそう言ってたかも」

「だから、『告白は、夕方の海で好きだって叫ばれてみたい』って
「！」

「そうだったそうだった！私その時ちょっと引いたもん！」

「でしょ?! いい? ようするに、亜理紗はものすごく夢見る女
なわけ」

今度は私が指を立てる番。

ぴしりと、自信を持って人差し指を立てた。

「……うん」

「てことは、他の女の子がウザいって思うくらいなのが、亜理紗
には丁度いいと思わない?」

自信に満ち溢れた私の視線を逃れるように、裕子が下を向いて。

「……そうかも、しれない、わね」

裕子の返答に、私は思わずガッツポーズ。

形勢逆転。

私の勝ちである。

「よし、じゃあマスコットで決まり、だよな？」

拓也が頃合を見計らって、うまくまとめる。

西田も、ようやく会話に参加する姿勢に戻って。

「マスコットで決まり。・・・でも、」

「でもって、まだ何かあるのかよ」

途端に顔を曇らせる私に、拓也はがくりと項垂れた。

「今週の日曜にドリームパーク行くから、かなりそれで仲川は不利になると思う」

私の言葉に、拓也と西田は顔を見合わせる。

「なに、国本、もうそんな約束したのかよ」

西田が少し驚いたように言った。

「結構強引な約束だったんだけどね。でも大丈夫！私と尚美がちやんと邪魔してくるから」

「は？」

裕子の言葉に間抜けな声をあげたのは拓也。

怪訝そうに眉を寄せている。

「なんでそこで尚美と中間が出て来るんだよ」

拓也の問い掛けに、裕子はいやりと口の端を上げて。

「だって。私も尚美も誘われてるもん。向こうが三人組だからね」

それを聞いて、今気が付く。

西田や仲川、そして拓也も、私たちがそれぞれ三年三人組とメール

アドレスを交換したことは、まだ知らないのだ。

だって言っていないもん。

「尚美、そんなこと聞いてな」

キンコンカーンコン。

くるりと私のほうを向いた拓也を遮るようにチャイムが鳴る。

なんとなく拓也の機嫌が悪そうだったので、私は軽く笑って逃げように席に着いた。

三時間の補習が終って。

「仲川ー」

裕子と私は、まだ死にかけている仲川の席まで歩いていく。

「・・・おっ」

私たちに気が付き、仲川の力のない声が返ってきて。

裕子は思わずバシリ！と仲川の背中を叩いた。

「しっかりしなさい！私と尚美は、あなたのことを助けてあげよう
と思っ、今ここにいるんだから」

裕子の言葉に、私も頷く。

「いい？あなたは今日からフェルトでマスコットを作るの」

いきなり何のことやら、仲川の頭の上に？マークが三つほど浮かぶ。

「あーだからね！」

痺れを切らしたように、裕子は続けた。

「あなたがマスコットを作って、それを告白と同時に、亜理紗にプレゼントしようっていうわけ！わかる？」

わかる？と一応疑問形で終ってはいるが、その言い方は「わかれ」と命令しているのとほとんど変わりはなくて。

仲川は、こくこくと頷いた。

「で、これ」

私は、色とりどりのフェルト生地と裁縫道具を、ドンと机の上に置いた。

因みに裁縫道具は、中学で使っていた四角いキティちゃんのやつ。

「必要なものは一応揃えてきたから。作り方もできるかぎり教えるつもりだし、とにかく頑張ろ！」

「ね！」と仲川の肩を軽く叩くと、仲川は私たちの顔を交互に見比べる。

「お前ら・・・いい奴だな・・・！」

そう言って軽く目を潤ませる仲川に、裕子も私もちよつと引いたけど。

とにかく少しでも早くマスコットを完成させなきゃいけない。

「さーやるわよー！」

裕子のその一声で。

早速私たちはマスコット作りを開始した。

何を作るかだけど、それは亜理紗の大好きなマリイちゃんに決定して。

適当にマリイちゃんの型をフェルトに描いていく。

私たちならそういうことはすぐにできるんだけど。

ほら、仲川でしょ？

モタモタとした仲川の手つきに裕子はイライラを募らせていたけど、これだけは仲川本人がやらなければ意味がない。

「できたー！」

仲川が喜びの声を上げたのは、もう夕方の五時半をまわった頃。

「遅いわー！」

私たちしかいなくなった教室に、裕子の怒鳴り声が響く。

勘違いしちゃいけない。

できたのはマリィちゃんのマスコットじゃない。

白いフェルトの、マリィちゃんの型描きだけである。

「まあまあ、初心者なんだから仕方ないって」

宥める私も、さすがに少し疲れていた。

「いい？仲川。明日も忘れずに絶対そのフェルト持ってくんのよ」

裕子はそう言いながら机の上を片付け始めて。

今日はこれで終わりということになった。

うーん。

亜理紗と祐樹先輩が付き合う前に、このマリィちゃんは完成するの
だろうか？

ちょっと心配。

18・冷たい三日月1

17・冷たい三日月1

朝、九時五十六分。

只今、ドリームパークのエントランスゲート前に、裕子と亜理沙と私の三人は立っている。

ついにやってきてしまった、日曜日。

仲川の Mascot 作りは、順調にいつているのかいないのか。

昨日ようやく頭の部分が完成した。

あ、まだのっぺらぼうですけどね。

ちらりと隣を見ると、裕子も亜理沙も、学校の時よりも大人っぽいメイクで仕上げていて。

裕子は、股下の短いグレーのパンツから、ゴールドのサスペンダーを垂らして、白い裸の女の人のプリントされたTシャツは、ぴたり

とスタイルの良い体に張り付いていた。

亜理沙はピンクのワンピースで。

白いミュールが、女の子らしさをより引き立てていた。

二人とも、行きかう人の目を引くほど、綺麗だと思っ。

それに比べて私は。

メイクは軽くしてはいるものの、この前拓也と遊んだ時とは比べ物にならないくらい雑。

原色的なオレンジのTシャツとカーキのパンツという、なんともボ
ーイッシュなこのスタイル。

おまけに胸も無いときた。

美人二人に挟まれた感覚。

私服でとなると、なかなかキツイものがある。

はあ、とため息を一回ついた時、

「あ、来た！おーい！こっちこっち！」

裕子が大声を出して手を振った。

見ると、あの三人組が優雅にこちらへと歩いてきていて。

河本祐樹先輩。

相変わらず眩しい金髪で、爽やかに手を上げる。

黒いズボンが、長い足を更に長く見せていて。

白のタンクトップの上に羽織られた淡い黄色のパーカーは、なんともいえないほど夏によく合ってた。

田中光太先輩。

私たちを見つけて嬉しそうに振るその手には、いくつものアクセサリ。

迷彩柄のズボンに黒のタンクトップという、なんとも光太先輩らしいファッション。

そして、河本聡。

白と青のボーダーのワイシャツにジーンズという、なんともラフな格好。

だけど、その鎖骨にはしっかりと髑髏のネックレスがギロリと光っていて。

長い茶色の髪は、かすかに吹く風に、さらりとなびいていた。

この三人。

悔しいけど、本当に無敵だと思う。

いや、本当に。

そこらへんの女の子たち、皆彼らのこと見てますからね。

「うめんね、待った？」

私たちのところにくるなり紳士的な笑顔を見せる祐樹先輩。

「いえ、全然大丈夫です！」

少し緊張気味の亜理沙が、胸の前で手をパタパタと振った。

上手く出会えたところで、さっそくチケット売り場へ。

少し長めの列ができていたけれど、すんなりと順番がまわってきて。

「何名様ですか？」

受付のお姉さんが綺麗な笑みを浮かべて聞いてくる。

「大人六枚」

祐樹先輩が答えるのと同時に、私たちは鞆から財布を取り出した。

えーと。

大人フリーパスは、四千五百円か。

料金を確認しつつ財布を開けると、

「あーいいよ。お金は俺たちが払うから」

くるりと私たちの方を向く三年三人組。

「え、でも」

困ったような声を出す亜理沙。

裕子も私も、どうするべきか少し悩む。

「亜理沙はわかるけど、こちらは、ねえ」

言いながら裕子が私に同意を求めてきて。

「裕子と私は、自分で払います」

私は再び財布を開けた。

祐樹先輩に好意をもたれている亜理沙は、確かに払ってもらってもおかしくはないけど。

裕子と私は、別に光太先輩や聡にどうこう思われているわけじゃないし。

千円札を四枚取り出した。

「あーもう！いいつつつてんだから、いいんだよ！」

「あっ」

急に大きな声を出したかと思うと、聡はいきなり私の財布と四千円を取り上げると、四千円を財布の中に雑にしまい込んでしまった。

そして再び私の手元に返ってきた財布。

「おら、もうチケット買ったから。さっさと行くぞ」

聡はぶっきらぼうに言うと、「ごちゃごちゃしていた間に買い終わったチケットを一枚、私に押し付けるように渡して。」

「あ、ありがとう」

裕子は光太先輩から、亜理沙は祐樹先輩からチケットを受け取る。

私たちは仕方なく財布を鞆の中に戻し、歩き出した三年三人組に付いて行った。

入り口を通り抜けるときに、フリーパスの証となるベルトを腕につけて貰って。

中に入ると、そこは外の世界とは全く違う、本当に夢のような光景が広がっていた。

「わー！」

小さな頃に数回来たことがあるくらいで、まったく記憶になかったから。

私は思わず声をあげた。

かぞえられないくらいの花が植えられた下段が、目の前にある大きな噴水をぐるりと取り囲んでいて。

いたるところに、小さなお店。

そこからは、色とりどりの風船がふわりと宙に浮いていた。

「ぶつ。何そんなに喜んじゃってんだよ。ガキだな、やっぱ」

少しの間夢の世界に浸っていた私を、いつもの憎たらしい声が引き戻す。

「む。いいでしょ、私は感受性豊かな純粋な女の子なの。あんたみたいなの、心の干からびちゃった不良野郎とは違うんですー」

「誰が純粋な女の子だよ」

鼻で笑う聡に、戦闘体勢に入る私。

「まーまー、二人ともー」

苦笑を浮かべてとめに入る亜理沙。

「ほら、沢山乗り物あるよ。何から乗ろっか？」

裕子はパンフレットを広げて地図とにらめっこ。

そんな裕子の隣から、光太先輩と一緒に裕子の広げていた地図を覗き込んで。

いきなり距離の近くなった光太先輩に、裕子は少し驚いたように顔をあげたけど、何も言いはしなかった。

「最初だから、空中ブランコとかからがよくな？」

言いながらポンと地図のある部分を叩く光太先輩。

それは、ここからそんなに離れていない所で。

「いいですね、そうしましょうか」

裕子は言いながら地図を畳み、鞆にしまう。

「じゃあ行こう」

祐樹先輩が言って、私たちは空中ブランコに向って歩き出した。

そのとき、祐樹先輩は亜理沙の隣を歩いて。

そっと、その手が亜理沙の肩に回ったのを、私たちは見逃さなかった。

私たちがこうして此処にいる理由。

まあ、強引に誘われたっていうのもあるんだけど。

亜理沙と祐樹先輩の仲を邪魔するためでしょ？

私は裕子と目を合わせると、大きく息を吸い込んで、

「亜」

理沙と言おうとしたんだけど。

「・・・なにすんのよ」

裕子は光太先輩に、私は聡に腕を引つ張られて。

腕を肩に回され、がちり捕獲されている状態。

「お前らは、俺らと」

聡はニヤリと口の端を上げる。

「はい？」

「よーするに、祐樹と亜理沙ちゃんは別行動にしてあげましょーね
つてことー!」

今度は光太先輩が楽しそうに言っつて。

「はー?!」

なに馬鹿言っつてんのよー!つて怒りながら裕子は暴れたけど、その腕

が解かれることはなくて。

「亜理沙ー！」

私の呼ぶ声も空しく。

私たちの異変に気付かない亜理沙は、祐樹先輩と共に、日曜日の遊園地という人ごみの中へと消えていった。

19・冷たい三日月2

19・冷たい三日月2

「だめ。圏外。ここほんと電波入んない！」

裕子の地団駄を聞きながら、私たちはさっきの場所より少し奥に進んだところにあるベンチに座っていた。

「諦めた方がいいって、裕子ちゃん。俺らは俺らで楽しく遊ぼうよ。」

能天気な声を出す光太先輩を、裕子がキッと睨む。

「亜里沙に何かあったらどーすんのよ」

さっきまでの敬語はどこへやら。

裕子は携帯をポケットにしまうと、私の横にデン！と座った。

「裕子、もう仕方ないって。たぶん合流するのは無理だよ。」

何度も携帯に電話したけれど、こっちもすぐに圏外になるし、かかったとしても次は亜里沙の方が圏外だしで。

連絡は全く取れない状態。

「安心しろよ。祐樹に限っていきなり手を出すとか、そんなへまはしねえから。」

「そうそう！だから裕子ちゃんも一緒に楽しもうよ！」

聡と光太先輩の言葉に、裕子は一回ため息をついて。

「仕方がない。今日は諦めるしかないかな。」

いっぱい食わされた悔しさは、やっぱりまだ消えてないけど。

裕子も私も、せっかく奢ってもらったんだし、久しぶりのテーマパークを楽しむことにした。

で。

なんでいきなりジェットコースター??

ベンチから立ち上がってなんとなく歩き出して。

行き着いた先が、今並んでいる『サンダー』の最後尾。

「空中ブランコじゃなかったの。」

私が言うと、

「なに、お前ジェットコースター怖いのか？」

やっぱガキだなと鼻で笑う聡。

「べ、べつにそんなことないし！」

「はいはい。」

私の抵抗は軽くスルーされて。

裕子は私の前で、光太先輩となにやら楽しくおしゃべり中。
うん。

すぐ近くにいるのに、完璧に分裂してしまった。

「ねえ、ほんとにこれ乗るの?」

ツイツイと、聡のワイシャツを引っ張る。

「やっぱり怖いんじゃないか。」

「そ、そんなこと……ない、けど」

「けど、なんだよ」

下を向いた私の顔を、聡が覗き込む。

「……なんでもない。」

少しだけ様子のおかしい私に、聡は首を傾げながら体勢を戻した。

言えない。

言えない。

ジェットコースター乗ったこと無いなんて。

そんなこと、絶対言えない！

テーマパーク自体は何度か行ったことはあるんだよ。

でも、お父さんもお母さんも絶叫系が苦手だし。

友達と行った時も、なぜかジェットコースターだけは乗らなかつたし。

人生初となるジェットコースター。

十七でジェットコースター初体験、なんて。

そんなこと、口が裂けても・・・

「なあ、光太。俺ら、やっぱこれ乗んのやめるわ。」

え？

悶々と心の中で格闘していた私は、突然の聡の「乗らない」発言に顔を上げた。

「へ？どうしたんだよ。」

光太先輩と裕子がくるりとこちらを向く。

「なんとなく。ジェットコースターとか乗ったら髪型くずれるし。」

「髪型つて、お前相変わらずだな。」

「うるせー。」

二人のやりとりを、ぽかんと見ている私。

今一体、何が起こったというのだろう。

「あ、じゃあさ、聡。」

光太先輩が聡のワイシャツをぐいと引っ張り、耳元に何かを囁いた。

「あー分かったよ。じゃあ、俺ら行くから。」

何が分かったというのか。

裕子も私も、状況が上手く飲み込めない。

「ほら、マナイタ。お前は俺とこっち。」

「えっ、あっ、え?!」

聡の行動に対応しきれない私の腕を、聡がぐいぐいと引っ張っていった。

離れないように持たれた手首は、ぎゅっぎゅっ歩きたびに少しだけ痛んだけれど。

足が縛れない様に、私は必死に聡に着いて行って。

気が付いたら、あの長い列から少し離れたところまで来ていた。

「ねえ！聡！」

段々と歩調が遅くなった頃に、私は言った。

「なんだよ？」

「なんでいきなり、ジェットコースターやめようだなんて」

歩くスピードはもう酷くゆっくりになっていて。

知らない間に、聡の手は私の手首から離れていた。

「なんでだあ?」

「あ、うん。」

私の質問に、腕を組む聡。

「おい、マナイタ。」

「な、なによ。」

私よりずっと背の高い聡は、私を見下ろすように目を細めて。

「お前、ジェットコースター、やっぱり怖いんだろ?」

突拍子もないほど、ズレた内容。

「こ、怖くなんか無いって言ったでしょ?! 乗ったことがないだけよ!」

相変わらず強がる私の言葉に、聡はフツと表情を和らげた。

「・・・あ」

それを見て、自分の失言に気付く。

しまった。

「ジェットコースター乗ったことなかったのかよ」

「・・・うん」

そのことに突っ込んでくる聡。

なんとなく恥ずかしくなって、下を向く私。

「たく」

ほら。きつと馬鹿にされ

「そづいつことは早く言えっつての。」

「・・・え？」

顔を上げると、ポンと頭の上に手を乗せられて。

「強がるのも大概にしるよ。」

そのときの聡の笑った顔は、なんだかものすごく優しくて。

いつものムカつく奴からは想像できないくらいかっこよく見えて。

「あ、ありがとう。」

私は、不覚にも頬が赤くなるのを感じた。

「うしー!じゃあ空中ブランコでもいくか」

うーんと背伸びしながら言っ聡に。

「え？裕子たちは？」

当然の疑問をぶつける。

「は？あー、あいつらは二人でまわりたいんだとよ。」

「・・・はい？」

さらりとした聡の言葉を上手く理解できない。

ていうか、理解したくないけど。

亜里沙と祐樹先輩で二人。

裕子と光太先輩で二人。

となると。

「私とあなた、二人でまわるってこと？」

なんとも言えない顔をする私を見て、聡は眉を寄せる。

「なんだ。不満かよ？」

いや、不満というか、なんというか。

そう、私が無意味に一人で悩んでいると、

「俺みたいな男前と二人で歩けるんだから、ありがたく思え！」

「わっ！」

そう言って聡はパシリと私の手首を再び掴んで。

「今日は楽しもうぜ。」

空中ブランコ目指して歩き出した聡に引っ張られるようにして、私も足を動かした。

20・冷たい三日月3

20・冷たい三日月3

空中ブランコに乗った後、きぐるみ達のショーを見たり、他のアトラクションに乗ったりして。

お昼はパーク内のファーストフード店で済ませて。

それからまたアトラクションに乗って。

時間が経つのなんてあっという間だった。

コーヒーカップ馬鹿みたいに回して目を回したり。

お化け屋敷で無駄に騒いだり。

ムカツク奴だけど、聡といると、なんだかすごく楽しかった。

「あ、見て。このネックレス可愛い」

空が暗くなって、至る所がライトアップされ始めた頃。

たまたま通りかかったお土産やさんの前で、思わず足を止めた。

「ネックレス？」

私が見つめていたネックレスを、隣から聡も覗き込む。

それは、三日月の形をした、ゴールドのネックレス。

先端には、小さなトルコ石が埋め込まれていて、なかなか見ない組み合わせに引っ惹かれてしまったのだ。

「ね？可愛いでしょ」

じつとネックレスを見ている聡に問いかける。

お前には似合わねえよって笑うだろうと思ったから、そうやって真剣にそのネックレスを見ている聡が、少し意外だった。

「聡？」

なかなか動かない聡のワイシャツを軽く引っ張る。

すると聡はぱつと顔を上げて。

「おねーさん、この三日月のネックレスちょうだい」

そう言った。

・・・はい？

聡に呼ばれた若い店員が店の中から出てくる。

「聡？」

私のことは軽く無視して、その店員に五千円札を一枚渡す聡。

店員はおつりをとりにレジの方へいき、戻ってくると、千円札一枚

と小銭をいくらか聡に渡した。

「袋にお入れ致しましょうか？」

「あ、このままで結構です」

ありがとうございますございましたという声を背中に受けながら。

また聡に腕を引っ張られる私。

もう空はすっかり暗くなっている。

おおきな時計台は、もうすぐ八時を指そうとしていた。

「聡？」

呼びかけても止まらない。

「聡？」

「最後にあれ乗るぞ」

「あれ？」

今向っている方を見る。

そこには、何色もの光でライトアップされた大きな観覧車がゆっくりと回っているのが見えた。

「観覧車？」

私がきくと、

「最後には観覧車って。お決まりだろ？」

聡は振り返って笑いながらそう言った。

もうすぐ閉園ということもあり、だんだんと人の少なくなっていくドリームパーク。

昼は込み合っていたレストランも、ガラス窓の向こうに見える席はがらりとすいていて。

ただ観覧車のところまで来てみると、若い男女で酷く込み合っていた。

聡と私が、観覧車待ちの列の最後尾に並ぼうとしたとき、

「聡ー！尚美ちゃん！」

列のずっと前の方から声がして、見ると光太先輩と裕子、そして亜理沙と祐樹先輩が手を振っていて。

私達はその四人の所へ割り込ませてもらった。

「なんか久しぶりー」

そう言って笑う光太先輩。

その言葉に、裕子たちも笑う。

「なんかはぐれちゃったね」

そう言ったのは亜理沙で。

まだ真相に気が付いていない様子。

そんな亜理沙のに、そ知らぬ風に相変わらず爽やかな笑顔を浮かべている祐樹先輩。

うん。

なにはともあれ、それぞれ結構楽しかったみたい。

大きな観覧車はいくつもコンテナがあって、順番はすんなりとまわってきた。

まず亜理沙と祐樹先輩が乗って、次のコンテナに裕子と光太先輩が乗り込んだ。

私たちにまわってきたコンテナはうすい青色で。

「足元にお気をつけ下さい」

ドアを押さえながらの係りの人の言葉を聞きながら一歩中に足を踏み入れた。

身を少しかがめて、私の跡に聡も乗り込む。

その時

尚美！

「へ？」

名前を呼ばれたような気がして、ドアの向こうを振り向いた。

だけど私の知っている人は誰もいなくて。

「どうかしたか？」

「ううん・・・なんでもない」

不思議そうな顔をする聡。

コンテナのドアは、静かに閉められ、チェーンが掛けられた。

21・冷たい三日月4

21・冷たい三日月4

ゆっくりと動くコンテナは、ただど確実に上へと回っていく。

「マナイト」

「なによ」

相変わらず変わらない私の呼び名。

もう訂正するのはいいやって、半分諦めモード。

「動くなよ」

「へ？」

意味不明なことを言うと、聡はそろりと立ち上がった。

そして、

「え？なに？え？」

ゆっくりと私のほうに近寄ってきて。

戸惑う私を他所に、聡はそっと、さっき買ったネックレスを、私の首に付けてくれた。

「・・・ネックレス」

それはかすかな光でもキラリと光って。

「うん。似合うじゃん」

そう言って静かに微笑む顔は、ジェットコースターのあの時に見せた、やっぱりすごく優しい顔。

「えと・・・お金、」

「俺が買いたくて買ったんだから。お前はそれ付けてくれてほしいんだよ」

外から入ってくるイルミネーションの光が、聡の顔をほのかに照らしていて。

そうか。

聡は私より一つ年上なんだって。

なぜかその時初めて思った。

「あのさ、私、」

「分かってる。言わなくても」

ゴンドラの少し曇った窓からは、遙か下の何色ものライトが幻想的な光を映し出しているのが見えた。

それはとても綺麗で。

だけどなんとなく、少しだけ寂しかった。

「お前と裕子ちゃんが、祐樹のことに賛成してないってのは、朝から気付いてた」

聡の視線は、決して鋭いものじゃなくて。

だけど、私から反らされることもまた無かった。

「別に、反対してるわけじゃないの。ただ…」

先を言おうか、一瞬迷う。

祐樹先輩側の聡に仲川のことを言ってしまうと、仲川が不利にはならないだろうか。

「ただ？」

「…ごめん、言えない」

丁度つぺんまで来た頃、上空の風に煽られて、ゴンドラがギシリと音をたてた。

「祐樹先輩はかっこいいし、優しいし、すごく良い先輩だと思う。でもね、」

「いいって。祐樹のことは祐樹のことだし。上手くいってもいかなくても、それは俺にはどうでもいい」

「聡…」

なんとなく、申し訳なく感じてしまう。

「だけど、まあ、今日は悪かったな」

「え？」

向かいに座る聡。

そのごめんが何に対してなのかが、よく分からない。

「何が、ごめん、なの？」

「いや、結構無理矢理な所があったしな。一日潰しちゃったわけだ

し」

聡の長い足が、狭いゴンドラの中で窮屈そうに曲げられている。

私は意外な聡の言葉に、思わず吹き出してしまった。

「ぷっ」

「な、なんだよ？」

「だって、『ごめん』なんて、あんたには一番似合わない言葉なんだもん」

初対面で私をマナイタと罵り、なんでも自分中心だと思ってそうな聡。

その口から、「ごめん」なんて言葉がでるだなんて。

「俺はそこまで腐ってねーよ」

「うん。そうみたいでちょっと安心した」

「お前なー」

呆れたような、困ったような、なんとも言えない風の聡を見て、私はまた笑って。

そんな私を見て、聡もやっぱり笑った。

さっきまで遥か下で揺れていた木々が、もうゴンドラの窓を撫でて
いる。

「今日はありがとう」

三日月のネックレスが、ひんやりと鎖骨に冷たい。

「いちいちこそ」

にっこりと笑った聡の顔を、もうすぐそのネオンが照らす。

一度ギシリと大きく揺れてから、がらりとドアが開けられた。

「おかえりなさい。出口はこちらとなっております。足元、気をつけて御降り下さい」

夜には不釣合いな明るい係り員の声が聞こえて、私達はお互いに視線をドアの方へと向けた。

レディファーストというのだろうか、この時もやっぱり私が先にゴンドラから降りる。

聡が降りてから、入り口の隣の通路を通って、観覧車の乗り場から出た。

入り口の方には、もう二、三人しか並んでいなかった。

「もう終わりなんだね」

人の乗っていないメリーゴーランドが、軽やかなメロディに合わせて踊っている。

ほとんど人のいない広場を、すぐそこで合流した裕子や亜理沙たちとゆっくり歩く。

「一日が終るのなんてすぐだね」

「うん。あつという間だった」

夜空を見上げて、裕子と亜理沙が言った。

明るいネオンの所為で、星は一つも見えない。

「楽しんでもらえてよかった」

優しく微笑む祐樹先輩の目は、やっぱり亜理沙のことを追っ

その隣で楽しそうに笑う光太先輩は、なんとなく裕子のことを見ているようだった。

隣を歩いていた聡の方をふと見ると、たまたま視線がぶつかり合っ

お互い、静かに微笑んだ。

「尚美！」

突然名前を呼ばれて、ぴたりと足を止める。

他の皆も聞こえたのだろう、全員が、ゆっくりとその場に立ち止まった。

ゆっくりと振り返る。

「たく・・・や？」

何色ものライトの逆光で、黒い影しか見えなかったけれど。

それは、もう見慣れた、私の大好きな人。

そこには、少し息を切らして、拓也が立っていた。

22・冷たい三日月5

22・冷たい三日月5

「拓也……！なんで？どうしてここにいの？！」

信じられない状況が飲み込めると、私は拓也のもとへ駆け寄った。

「お前、観覧車乗るときにも呼んだんだぞ」

いつも付けているブラックのリストバンドで、拓也は額に浮かんだ汗を拭った。

「あれ、拓也だったの？」

「そうだって言ってるんだろ」

尚美！

ゴンドラに乗り込む時に聞こえた、あの声。

あれは、拓也の声だったのか。

てっきり聞き間違いだと思ってた。

「え、でもなんで、拓也が此処に？」

自分よりも上にある拓也の目を見るため、少し顔を持ち上げる。

そうすると、拓也はポンと私の頭の上に手を置いて、こう言った。

「夜遅いから。ちょっと心配で迎えに来たんだよ」

優しく細められた瞳が、ネオンと一緒に私を映していて。

ゆらりと、その中の私が揺れる。

「マナイト。そいつ、誰？」

「え？」

振り返ると、ゆっくりと聡が歩いてきて、私の隣で立ち止まった。
じっと、聡が拓也のことを見る。

背は、聡の方が少しだけ高かった。

「あのね、木高拓也っていつの」

「どっも」

頭だけの会釈。

それには何の反応も示さない聡に、拓也の視線が鋭くなる。

睨み合うように佇む二人。

「拓也…？聡…？」

閉園のアナウンスが流れて、今まで流れていた音楽が静かなものになる。

只ならぬ雰囲気に不安を感じ始めた時、フツと聡が拓也から視線を反らした。

「マナイタ、後はそいつと帰れ」

「え？あ、うん」

ジーンズのポケットに手を突っ込んで、聡は裕子たちの所へ戻って行った。

「あ、今日はありがと！楽しかった！」

私の声に、聡が振り返る。

「おう。またな」

そう言う聡の目は、まだ何処か拓也を見ているような気がした。

聡が戻ると、それぞれが私の方に手を振り、ゆっくりと出口の方へと歩き出して。

だんだんと小さくなる背中を、拓也と二人で見えなくなるまで見ていた。

「あれ、誰」

拓也は、もう見えなくなった聡たちの方をじっと見つめたまま言った。

「河本聡っていうんだけど、一つ上の三年。拓也は、会った初めてだったんだよね」

側を、一組のカップルが通りすぎていく。

拓也は、一旦下を向いてから、私の方に顔を向けた。

「そのネックレス…」

キラリと、ゴールドの三日月が首元で光沢を放つ。

「え？あ、これ、今日聡が」

「それ」

拓也の目が、夜の闇で微かに光る。

「全然お前に似合ってるねーよ」

さらりと、生温い風が吹き抜けていった。

少し離れたところにあるお土産屋さんが、大きな音を立ててシャッターを下ろした。

「拓也…?」

どうして、そんなことを言うの。

真夏の夜、不安で凍えそうになる。

拓也のその冷たい視線に。

息が止まりそうになるよ。

「帰るぞ」

「わっ」

そう言つと、拓也は私の手首を乱暴に掴むと、大きな歩幅で歩き出した。

暗い夜道を、手を引っ張られながら歩く。

ドリームパークを出ると、もうあの華やかな世界とはほど遠い、いつもの夜道が広がっていて。

青白い街灯の光に、数匹の蛾が舞っていた。

ぐいぐいと引かれる手首が、その度に鈍い痛みで痺れ出す。

私はなんとなく、ジェットコースターのときの聡の手を思い出していた。

あの時も、こつやって手首がぎゅっと痛んで。

足がもつれないように着いていくのが精一杯だった。

今、私が感じているのは、拓也の力。

誰よりも好きな、拓也の手。

いつもはもっと温かくて。

優しく私を包みこんでくれるのに。

なのに。

どうして今日は、こんなに苦しいんだろう？

歩き続ける拓也は、一度も私を振り返ることはなくて。

二人なのに、一人の時より、ずっとずっと不安だよ。

チャラランチャララン

暗い夜闇には不釣り合いな明るいメロディが、突然無機質に響きだした。

予想外のその音に、拓也も私も足を止める。

カーキのパンツのポケットで震える携帯。

「私のだ…」

私は携帯を取り出し、パカリと開ける。

明るいディスプレイには、『中間裕子』と表示されていた。

「はい、もしもし。裕子？」

『もしもし、尚美？聞いて！大変なのよ！』

電話越しで慌てる裕子の声が鼓膜を叩く。

何が大変なのか、よくわからない。

『今亜理沙たちと別れたんだけどね、祐樹先輩、亜理沙に明日家に来て欲しいって』

「え、あー、そうなの？」

『そうなの？じゃないわよ！それがどういいうことか、あんた分かってないでしょ』

ギャンギャンと割れる裕子の声。

ちらりと拓也の方を見ると、側にある街灯をぼんやりと眺めていた。

『明日亜理沙が祐樹先輩の家に行くってことは、亜理沙が祐樹先輩の告白を受け入れるってことなの』

「え？」

状況がようやく把握できた。

明日、亜理沙は祐樹先輩に、告白の返事をしなければならなくなつたのだ。

『だから明日学校が終わるまでに、仲川はなんとかしなきゃいけないってわけ!』

焦る裕子。

祐樹先輩に返事を返す前に、仲川は亜理沙に告白をしなければならぬ。

「でもマスコット、あの調子じゃ出来上がるのまだ先だろうし……」

いきなり迫ったタイムリミット。

良い案なんて、これっぽっちも浮かんでこない。

『仲川、どうすればいいのよ』

眉を寄せる裕子の顔が、目に浮かぶ。

「わからない…明日亜理沙が返事をする前までに、」

マスコットが出来上がれば、と、言葉が続くはずだった。

「?!」

『?尚美?...尚美?』

あまりに一瞬の出来事で、一体何が起こったのか分からなかった。

いきなり強い力で電話を持っていた手を掴まれて。

拓也の方を向いた瞬間、私の唇は、拓也のそれで塞がれた。

『もしもし?!尚美?』

携帯から響く、裕子の声。

そつと唇を離すと、拓也は何も言わずに私の携帯の電源ボタンをおした。

途端に裕子の声が消え、静寂が訪れる。

「拓...」

今のは、一体なんだったの。

頭が上手く回らない。

目を、拓也から反らすことができない。

「あいつらに…あんま関わんなよ」

そう言っつて、拓也は私の髪をサラリと撫でた。

その時の拓也の目は、なんだか苦しそうに、少しだけ揺れていた。

うん。似合うじゃん

ゴンドラの中での聡の優しい笑顔が頭をよぎる。

単純に嬉しかった。

意地悪だけど優しい聡を、私は好きだと思った。

全然お前に似合っつてねーよ

冷たい拓也の瞳。

聡とは反対の、ずっと冷ややかなその声音は、私を死なせてしまいそうだった。

ねえ、拓也。

拓也の全てが。

拓也の全てが、私を駄目にする。

だから今も。

さっきのキスで、頭がおかしくなりそう。

ねえ、拓也。

今のは何？

私は、拓也にとって何なの？

くるりと私に背を向けて再び歩き出した拓也。

私も、遅れないように歩き出す。

首元で一回、ひやりと三日月が揺れた。

23・マリイに愛をのせて

23・マリイに愛をのせて1

チャイムが鳴って、一時間目が終わった。

礼と同時に、教室が一気にうるさくなる。

「仲川」

席に座っていた仲川のところへ行くのが見えて、私も足早にそこへ向う。

仲川は裕子と私の顔を見ると、何故かふいと視線を逸らした。

「ど、どうしたんだよ。二人してさ」

机の上に置かれた手を見て、仲川が言った。

そのいかにも不自然な態度に、裕子と私は顔を見合わせる。

「仲川、あんた、マスコットどうなってる?」

「昨日は日曜だったけど、ちゃんと進んだ？」

土曜までに顔の輪郭ができたマリイちゃん。

昨日は、どのくらいまでいったらだろうか。

「あ、あー。それなんだけどさ」

机の上に置かれていた手をがばりと上げ、頭の上で組む。

仲川はくるりとこちらを向いて、笑った。

「やっぱり男がマスコットとか！キモくない?!」

楽しそうな喋り声が響く教室の中、私達の周りだけが、なんとなくおかしな空気になる。

その仲川の笑った顔は、なんとも間の抜けた、明るいのにな、何処か違うものだった。

「は？」

何を言ってるんだ？

「いやー、だからさ！今どき手作りマスコットとか貰っても、嬉しくなんかないっしょ？」

へらりとした笑顔はそのまま、裕子はその言葉に眉を寄せた。

「あんた・・・何言ってるの？」

「えー？だからー男が」

「亜理沙！今日もってかれちゃっわよ！祐樹先輩に！」

大きくはない、だけど腹の底から搾り出したような声で、裕子は机をバン！と叩いた。

「・・・え？」

裕子の言葉に、仲川の笑顔が消える。

「どづいづことだよ……？」

「……昨日、亜理沙、祐樹先輩に今日家に来てほしいって誘われたの。行くか行かないか。それが、祐樹先輩への返事なのよ」

昨日の電話のあと、結局良い案なんて見つからなかった。

やっぱり仲川が思いを打ち明けることしか。

亜理沙を引き止めることはできないんじゃないかって。

そうとしか、考えられなかった。

「あなた……どづすんのよ」

怒りなのか、呆れなのか。

低く唸るような裕子の声が、三人の間だけで響く。

「そんなこと、言ったって……」

「マスコットは？ねえ！仲川！マスコット、作ってないの？！」

今度は悲しそうに眉間に皺を作って、裕子は仲川の肩を揺らした。

されるがままの仲川に、私はもう、何も言うことができなくて。

「なんで、なんであんたはいつつも！そんなのよ！！」

周りの席にいた人たちが、少しずつこの小さな喧騒に気が付き始める。

でも、裕子はやめなくて。

その時、仲川のポケットから、ぽろりと何かが床に転がり落ちた。

「？」

「あっ……！！」

それに気が付いた仲川が、裕子を引き剥がし、慌てて手を伸ばす。

けど。

それよりも早く、私はそれを拾い上げた。

「これ……」

今私の手の中にある、柔らかい白。

フェルトの生地が、雑に扱ったのが、最後に見たときよりもざらざらとしていた。

「仲川……」

土曜日までは頭しかなかったマリイちゃんは、もうすっかり体もできていて、顔だって、リボンだってすっかりとつけられていた。

でも。

「頑張ったんだけど……そんなになっちゃったんだよ」

それは、正直マリイちゃんと呼べるか呼べないか。

そのくらい、歪なマスコットで。

こんなこと言っちゃ駄目だけど、猫なのか豚なのかさえも怪しかった。

それを見て、裕子と私は再び顔を見合わせる。

仲川の手を見ると、何本かの指先に、乱暴にバンソウコが巻かれていた。

キンコーンカーンコーン。

その時二時間目の始まりのチャイムが鳴って。

裕子と私は何も言っておげられないまま、席へと戻らなければならなかった。

先生が入ってきて、授業が始まる。

ノートを開いて、先生の流暢な英語を聞きながら、私は仲川の方を見た。

あのマリィちゃんを仕上げるのに、どれだけ時間がかかっただろう。指を針で刺しながら縫い続ける仲川を、なんとなく想像できて。

仲川はやっぱり、亜理沙のことを見ていた。

少し離れているから、どのような目をしているかは分からないけれど。

ただ、じっと亜理沙のことを見ていた。

その視線の先の亜理沙は。

仲川とは逆方向の窓の外をぼーっと眺めていて。

仲川が長い間亜理沙を思い続けていたことを知らないように。

やっぱり今も、亜理沙は仲川の視線には気付かない。

皮肉だと思った。

仲川が可哀想だとは思わない。

亜理沙に苛立ちを感じたりなんかしない。

だけど。

ただ、あの爽やかな祐樹先輩の笑顔が。

傷だらけの仲川の手とは天と地のようで。

私は、皮肉だと思った。

そつと、目を閉じる。

先生の英語が、頭の中を流れていく。

『全然お前に似合ってねーよ』

昨日の夜。

拓也の言った一言。

あの時の冷たい目を、私は何故か怖いと感じた。

離れていってしまっくんじゃないか。

『あいつらに・・・あんま関わんなよ』

ねえ。

なんであんなこと言ったの。

切なく揺れる拓也の瞳には、私はどういふふうに映っていたの。

あの時の口付けは
まるで幻のように。

信じられない私と、
いつもと何も変わらなかった今朝の拓也。

あれは、夢だったんじゃないだろうか。

あの後お互い何も話さずに、ただ夜道を歩いた。

手は、繋いでいない。

一定の距離を置いて、街灯の光を感じていた。

星が見えないなんて、またそんなことを思ったかもしれない。

ただそれは、口にするのではなく、沈黙だけがただ流れていて。

家に着くと、「またね」とだけ言って、なんとも言えない空気を残したまま、私たちは別れた。

忘れることができない感触と、幻のようにあやふやな感覚。

私の中で、拓也が大きな存在を占めているように、拓也の中でも、私は大きな存在でいられているの？

わからないことばかりで。

苦しいなんて感じる前に、私はおかしくなってしまうそつだよ。

その後もなにもなくただ時間だけが過ぎていって、次の十分休みの間は仲川に話しかけることもできずに、そのまま三時間目も、私たちに構うことなく足速に駆け抜けていった。

「亜理沙ちゃん」

終礼が終って少ししたとき、賑やかな廊下から祐樹先輩の呼ぶ声がした。

「あ……」

亜理沙は、私達の方を向くと、困ったような照れているような、なんとも言えない表情を見せた。

裕子も私も、亜理沙を引き止めることなんてできないから。

ただ、曖昧に笑うしかできなかった。

「亜理沙……行っちゃうね」

裕子が、ぼそりと呟く。

「仕方ないよ……こればかりは、仲川次第なんだもん」

亜理沙が、鞆をもって祐樹先輩の立っているドアの方へと歩いていく。

今日は、聡と光太先輩は一緒じゃないのを見て、本当にこれがラストチャンスなんだと思った。

仲川は。

その時仲川は、何をするでもなく、ただマリィちゃんの入ったポケ

ツトを握り締めて、鞆を机に置いたまま突っ立っていた。

亜理沙の方は見ずに、下を向いている。

ああ、もう駄目だ。

長い片思いが、こんな形で終わりを迎えるだなんて。

皮肉以外の、何者でもないじゃない。

その時。

「え？」

亜理沙が祐樹先輩のところへ行くと、祐樹先輩はふわりと笑った。

二人は、高さの違う肩を並べて、靴箱の方へと歩いていった。

唇を噛み締める。

見えなくなつて、これじゃ駄目だつて。

まだ、仲川は、終わりじゃないつて。

「仲川！」

私の声に、仲川がびくりと振り返る。

「行きなよ！早く、亜理沙とられちゃう前に！」

マリィちゃん、作ったじゃない。

「でも……こんなの、渡せるわけねーだろ」

可愛くないかもしれないけど。

でも一生懸命作ったじゃない。

「諦めないでよ」

仲川。

「亜理沙、待ってるかもしれないじゃん」

あなたはまだ、負けたわけじゃないんだよ。

「男なら」

だって亜理沙

「亜理沙のこと本当に好きなら」

祐樹先輩のところに歩いていく途中

「そのマリイちゃんと一緒に、その気持ちぶつけてこいよ」

仲川、あなたのこと振り返ったんだよ。

「宮崎……」

遠くでチャイムが鳴ったのが聞こえた。

24・マリイに愛をのせて2

24・マリイに愛をのせて2

仲川の目は一瞬ゆらりと揺らいだ後、ぎゅっと力の入ったものへと変わった。

心を決めた、男の目。

それはたぶん、祐樹先輩にも負けないんじゃないかな。

「イツチヨ行って来るわ!」

そう笑った後、仲川は走って教室を出て行った。

手には、あのマリイちゃんを握り締めて。

「尚美、あんたいきなりどうしたのよ。」

隣にいた裕子が驚いたような顔をしている。

「ん?なんか、ちょっと背中押してあげたくなったのよ。」

だってあんなの。

見ていられなかったんだもん。

じれったい恋は、ドラマだけで充分。

亜理沙も仲川も。

祐樹先輩には悪いけど。

ピエロに踊らされた哀れな主人公になんて、なって欲しくないじゃない？

「国本ー！」

窓の外から仲川の声が聞こえて、二人で窓のほうへ行く。

見ると、もう校門に続く坂に差し掛かった亜理沙と祐樹先輩めがけて、仲川がグラウンドを横切り突っ走っていた。

「俺はー！」

仲川の声に、亜理沙たちは足を止める。

「クーにーもーっ?!」

しかし、グラウンドの半分まで来たとき、仲川は足を絡ませて見事にこけた。

「あっ」

裕子が不安げに声を上げる。

なかなか起き上がらない仲川。

そうこうしている間に、祐樹先輩は亜理沙の肩を抱いて、少し無理矢理に坂を下り始めた。

亜理沙と祐樹先輩がとうとう見えなくなる。

「仲川……」

もう、駄目なのかな。

ねえ。

亜理沙。

もう、仲川は駄目なのかな。

絶望的に裕子が窓の外から視線を逸らした時、仲川がゆっくりと起き上がった。

そして、

「国本ー！お前が好きだー！！」

叫んだ。

「俺はーお前じゃなきゃー駄目なんだよー！！」

その大きな愛の告白に、隣の教室からも何人かが窓から顔を出す。

それは、少し古い恋愛ドラマのワンシーンのようで。

私は、『告白は、夕方の海で好きだって叫ばれてみたい』って言った亜理沙の台詞を思い出した。

「あっ！」

裕子の声が明るくなる。

仲川に向かって、亜理沙がグラウンドを横切って走っていた。

「よかったね、仲川。」

私はぼそりと呟いた。

仲川。

亜理沙には、あんたが丁度いいのかもしれない。

そりゃ、外見だって精神面だって祐樹先輩のほうがずっとかっこいいけど。

でも、亜理沙を想う気持は。

多分あんたに敵うやつは誰もいないよ。

「仲川、よかったじゃん。」

「え？」

突然聞こえたその声に振り返ると、拓也がいつもの笑顔で立っていた。

「え、何で拓也いんの？帰ったんじゃないの？」

当たり前のようにそこにいるけど、終礼が終わってすぐに姿が見えなくなっただから、てっきりもう先に帰ったんだとばかり思っていた。

「ん？お前を置いて帰らねえよ。おら、仲川も一件落ち着いたわけだし、俺らもさっさと帰んぞ。」

「あ、うん。」

ドアのほうへさっさか歩いていく拓也を、鞆を引っ掴んで追いかける。

「じゃあな、中間。」

「裕子、ばいばいー！」

「ばいばいー。」

裕子に手を振って、廊下へと出る。

教室を一步出れば、もう蒸し風呂みたいに暑かった。

「拓也、今まで何処にいたのよ？」

「んー内緒ー」

くすりと笑って誤魔化す拓也。

大したことじゃないよと付け加えたけれど、私は逆にそれが気になった。

私に言えないこと？

ゆっくり歩いて。

そんなことを考えながらお手洗いの前を通りかかったとき、女子用の方から出てきた生徒と見事にぶつかってしまった。

「いめんなさ・・・あ」

顔を上げると、

「柴山・・・さん・・・」

目を真っ赤に腫らした柴山さんが立っ

私を見るなり、柴山さんはキツと睨み付けてきた。

「いい気にならないですよ。あんただって違うんだから」

そう言うと柴山さんは、一瞬拓也の方を見てからまた苦しそうに眉を寄せて、教室のほうへと走っていった。

「今の、なに？」

全く理解できないさっきの台詞。

何をいい気になるのか。

私が何と違うというのか。

「ねえ、拓也も今の」

言いながら拓也のほうを向く。

けど、最後まで言うことができなかった。

「尚美、帰ろう」

「……っ」

また、並んで廊下を歩き出す。

もう何も聞けない。

柴山さんのことは口にしないほうがいい。

だって、さっきの拓也は、今まで見たことがないような、すごく不安そうな顔をしていたから。

でも。

なんとなく。

さっきの柴山さんの涙は、拓也が少しは関係しているんじゃないかって。

大したことじゃないよ

くすりと笑った拓也の言葉が、何よりも私の胸を掻き乱した。

25・ソファに預けて

25・ソファに預けて

「ただいまあ」

誰もいない家の中に、私の声が響く。

お父さんもお母さんも共働きだから、私は結構小さいときから鍵っ子だった。

別に、寂しいなんて思わないけど。

靴を脱いで、中にあがる。

リビングに入ると、すぐにクーラーのスイッチを入れた。

ゴーっという機械音と共に、涼しい風が回りだす。

ソファの上に鞆を置いて、洗面所へ。

帰ってきたら手を洗う。

これは宮崎家の決まり。

洗面所は脱衣所と一緒にあっていて、その奥にお風呂がある。

お風呂の換気扇の音が低く響いていて、暗いままの洗面所は、少しだけホラー映画に出てきそうだと思った。

電気のスイッチを押すと、淡い肌色の光が中を照らして。

なんとなく、ほっと一安心。

鏡の方を向くと、もう一人の私と目が合った。

「なに、そんなに不安そうな顔してるのよ。」

もう一人の私に話しかける。

「何もない。あの言葉通り、きっと大したことなんて何もないんだから。」

それでも鏡の中で私は、やっぱり不安そうに瞳を揺らして。

どうして。

何を隠す必要があるの？

私には、何故言えないのよ。

ねえ拓也。

隠し事なんてされたら、私。

不安でたまらなくなるじゃない。

あの赤い柴山さんの目が、頭の中で私を睨む。

キツと。

鋭く私を睨みつけてくる。

いい気にならないですよ

赤い目の柴山さんが言う。

いい気になんて、なってないわよ。

あんただって違うんだから

そんなこと言われたって。

何が私と違ってるって言うの？

なんで柴山さんは泣いていたの？

今日の放課後の間に、一体何があったの？

柴山さん。

それはやっぱり、拓也と何か関係が……。

「あー！駄目！考え出したらとまらない！」

ブルブルと頭を振って、絡まった思考を追い払う。

その所為で髪が軽く乱れた。

「そもそも。どうして私が睨まれなきゃいけないのよ。」

うん。

本当にそう。

私別に何もしてないんですけど。

仲川を応援していたことがそんなにいけませんかねえ？

「事情すら知らないのよ、私」

考えれば考えるほど腹立たしいことかもしれない。

くすりと笑って誤魔化した拓也も。

赤い目で睨んできた柴山さんも。

二人が何か関係していて、そしたら私は一体何をするつもりなのよ。

もう、どうでもいいじゃない。

蛇口を止めた後、手を振って水を払う。

ピツピツと何滴か鏡にかかってしまい、手をタオルで拭いてから、
適当にティッシュで拭いておいた。

「そつでしょ？」

ねえ尚美。

「だから、もう考えちゃ駄目。」

私は手で乱れたままだった髪を整えて、リビングへと向かった。

リビングのドアを開けると、クーラーが大分利いてきて、ひやりと涼しかった。

チャラランチャララン

「あ、携帯」

いつものメロディが、ソファの上の鞆の中から流れ出す。

鞆を少し乱暴に掴みあげて、中から震えている携帯を取り出した。

ディスプレイには、以外にも『笹塚美奈』と表示されている。

「美奈？どうしたんだろう」

パカリと開き、通話ボタンを押した。

「もしもし」

『もしもし？尚美？』

「美奈。どうしたの？」

美奈と離れて早三ヶ月が経とうとしていた。

それから連絡をとっていなかったわけではもちろんない。

毎週土曜に、決まってどちらかが電話をかけ、軽く一時間は話している。

これはもう習慣なのだ。

だから余計に、今の電話は疑問に思う。

平日に美奈が電話してくるなんて、あんまり無い事だもん。

『ごめんね、急に電話しちゃって。忙しかった?』

「ううん、大丈夫。今家に帰ったとこ。」

よかった、と電話の向こうで安心したような声を出す美奈。

美奈は少し心配性の気があるかもしれない。

「で、どうしたの?何かあった?」

いつもと違う日に電話をしてくるということとは、きっと何か伝えな
きやいけないことがあるのだろう。

『あ、うん。尚美はもう夏休みだよね?』

「そだよ。明日で補習も終わりだし。美奈のとは？」

『私は今日で補習終わったの。ねえ、八月三日って空いてる？』

八月三日。

「ん、ちょっと待ってね。」

電話の横の壁に貼られたカレンダーをペラリと捲り、八月のページを見る。

「三日だよね。」

『うん。』

一日、二日、三日。

うん。

特に予定なし。

「大丈夫。空いてるよ」

『本当？よかった。拓也も空いてるかな？』

美奈の声が嬉しそうに弾む。

「え？拓也？どうして？」

『三日、私、尚美のところに遊びに行こうと思って！』

「え、本当？！」

『うん！』

思わぬ朗報に、私の声も明るく弾む。

美奈と会える。

美奈と会える！

『だから、拓也も都合大丈夫かなって思って。』

「あー、拓也なら大丈夫でしょ。」

夏期講習なんてとるって言ってなかったし、旅行に行くなんて話もしてないし。

『そうかな?』

「うん、そうだよ。」

『そうだよね!よかった、二人に会える!』

携帯を持って嬉しそうに笑う美奈の笑顔が眼に浮かぶ。

私だって、もちろん嬉しい。

「ねえ、うちに泊まってくでしょ?」

『あーうん。四日は朝から予定があるから、三日の夜帰る。』

「え、そうなの?」

美奈が北海道に引っ越してしまう前は、よくお互いの家にお泊りをしたものだ。

そのときは男の子である拓也は少し仲間外れにってしまったけれど。

「残念。」

『ごめんね、尚美。ありがとう。』

「うん。一応拓也にも予定聞いておくね。」

『そうしてくれる？無理そうだったらまた連絡して欲しいな。』

「OKOK。」

『助かる。じゃあまた電話するね。』

「あ、うん。またね」

バイバイという可愛らしい声の後、プツリと電話が切れた。

プープーという機械音が流れて、私も電話を切る。

携帯を手に、ぼふりとソファに座り込んだ。

全体重を柔らかいスプリングに預けてしまう。

「八月三日か・・・」

今が七月二十五日だから、あと一週間とちょっと。

「楽しみだな・・・」

連絡は毎週取っている。

だから声だって聞いているわけだけど。

電話越しで話すのと、会って話すのでは、やっぱり全然違うじゃない？

美奈が引っ越してしまってから、まだ一度も会っていない。

美奈、変わっていないだろうか。

もしかして少し太ってたりして。

北海道って食べ物おいしそうだし。

でも、痩せ細ってしまうより、少し太った方が幸せそうではないかも
しれない。

拓也、予定大丈夫かな。

よし。

早速聞いてみるか。

また携帯を開き、拓也のアドレスを呼び出す。

カーソルを合わせた後、通話ボタンを押した。

プルルルという呼び出し音が静かに響く。

『もしもし』

「もしもし、拓也？いいお知らせがありまーす！」

拓也の声が聞こえた途端に、私は喋りだした。

「拓也、三日って空いてる？」

『三日？もう七月三日はとっくの昔に過ぎてんぞ。』

「八月三日に決まってるでしょーが！」

真剣に答えた私に、拓也が可笑しそうに小さく笑う。

『冗談に決まってるだろーが。あー、空いてるけど。』

「おお！やっぱりねー」

私の読みは正しかった。

『やっぱりねって・・・お前それちょい失礼。てか、なんだよ？いい知らせて』

不思議そうな拓也の声。

それと一緒に、電話の向こうからは何度か聞いたことのある洋楽がかすかに聞こえた。

「それはねー。美奈が、こっちに遊びにきてくれるって！」

口にただけでも嬉しくてたまらない。

楽しみで仕方がない。

だから、

『え・・・』

すごく拓也も喜ぶだろうと思っていたから、少したじろいだ様な拓也の声が返ってきたのは私にとって予想外だった。

「拓也？」

『あ、あー、そっか。うん。楽しみだな』

いや、あんた全然そんな感じじゃないでしょ。

最後の方は確かに声は明るくなっていたけど。

『三日、俺は大丈夫だから』

「あ、うん」

『なんかあったら、また教えてくれよな』

じゃあ、と言うと、拓也は一方的に電話を切ってしまった。

今のは一体何だったんだ。

今日の拓也は、やっぱりおかしい。

思い出したくなくても、考えたくなくても、あの柴山さんの赤い目が、どうしても私を睨んでくる。

私はまた頭を振った。

考えない考えない。

今は三日のことだけ楽しみに待っていればいいの。

そう自分に言い聞かせて。

ソファに体を預けたまま、私は静かに目を閉じた。

26・出口の無い不安

26・出口の無い不安

補習最終日。

学校に行きたくないな、なんて。

朝起きたとき何故かそんなことを思った。

それがどうしてかなんてわからなかったけど、やっぱり昨日の拓也の反応が引っ掛かっていることは確かだった。

おかしい態度。

おかしい反応。

昨日私がいなかった拓也の空白の時間に、何かがあったんだ。

きっと。

私には言いたくない何かが。

「おはよ、尚美！てか聞いて、ビッグニュースよ！」

教室に入るなり裕子が駆け寄ってくる。

もちろん隣には亜理沙が。

「おはよ裕子。亜理沙、仲川とよかったね。」

私の言葉に亜理沙の顔が一瞬で赤くなる。

相変わらず可愛い子。

「私のことはいいの！」

「尚美、真剣に聞きなつて。」

「なに、どうしたの二人とも。」

そんなに興奮して。

そんなに大変なことがあったのかな。

「あそこ、見て。」

裕子が視線を動かして示す。

私は言われるままにそちらを向いた。

「柴山さんの、席？」

そこにはまだ主が来ていない空っぽの机と椅子。

柴山さんの席。

「今日、多分来ないよ。あいつ。」

あいつ、というのはもちろん柴山さんのことだ。

「でも柴山さんの遅刻なんていつもの…」

柴山さんの遅刻がどうしてそんなに大事なんだろう。

「違うの、尚美。そうじゃないの。」

亜理沙が首を横に振る。

「フラれたんだって。」

「え？」

「拓也が柴山さんをフツたらしいよ、昨日。」

私は再び柴山さんの席を見た。

周りを見ると他の生徒たちもちらちらと柴山さんの席を見ていた。

もう噂は多くに広がっているらしい。

「でも、そんなの、ただの噂かも」

「そうでもないみたいなの。」

私の意見を亜理沙が遮った。

「実際にその現場を見たって子がいるんだって。」

キーンコーンカーンコーン。

ここでチャイムが鳴った。

「また後で」と言っただけで裕子と亜理沙が席に戻っていく。

先生が入ってきて挨拶をして席についた。

出席をとっている間、私はぼおつと拓也の方を見た。

拓也はギリギリに教室に入ってきたようで、今は鞆からペンケースなどを取り出していた。

昨日亜理沙と仲川を見ていたあの間。

拓也がいなかったあの時。

きつと拓也は柴山さんに呼び出されていたんだ。

柴山さんはどんな言葉で拓也に想いを伝えたのだろうか。

拓也は本当に断ったのだろうか。

ふいに拓也と目が合った。

優しく笑ってひらりと手を降ってきた。

私はなんとなく笑ってから窓の方を向いた。

いつもと変わらない拓也。

だけど状況は昨日から大きく変わっていて。

結局、先生が名前を呼んでも、柴山さんの返事はかえってこなかった。

「じゃあ尚美は柴山が泣いてるの見たんだ？」

お昼休み。

バナナ・オレを一口飲んで裕子が言った。

手元にあるサンドウィッチはもう半分ほどなくなっている。

「うん。トイレから出てくるところだったんだけど、目が赤かったから…。」

あんただって違うんだから

あのとときの柴山さんの赤い目が頭の中に甦る。

私はお弁当に入っている肉ボールを割り箸で突き刺した。

「仲川と亜理沙がくつついてる間にそんなことがあったなんてね。」

「私のことはいいから！」

裕子の言葉に本日二度目の亜理沙の赤面。

それを見て私と裕子が笑う。

「宮崎ー」

急に名前を呼ばれて箸を止めた。

ドアに近い席の男子がこちらを向いている。

私は裕子と亜理沙に「ちよつとごめん」と断ってから席を立った。

「どつし」

「おせえよマナイタ」

ム力つく声と呼び方。

「うわ、聡。」

廊下の壁に凭れるようにして立っている河本聡。

「どうやらこいつが私をよんでいたらしい。」

私は廊下に出て聡の横に立った。

「うわ、て何だよ。」

「べつにー」

「俺が直接会いにきてやったんだからもつと喜ぶ。」

「は？だれが。あなたのその無駄な自信は一体どこからでてくるわけ？」

「無駄ってなんだよ、無駄って。」

「で、何の用よ。」

「やっぱりムカつく奴だ。」

「ドリームパークでカツコイイだなんて思ったのはきつと何かの間違いだな。」

「あ、そうそう。今日の放課後あけとけよ。」

「はい？」

「どうせ暇だろ。」

「はは。」

「なんだこいつ。」

「光太がどうしても裕子ちゃんと喋りたいらしくてさ。」

なるほど。

「…亜理沙は行けないよ。」

祐樹先輩には悪いけど。

もう亜理沙は仲川のものだし。

「わかってるって。祐樹もそんなに執着する奴じゃな」

「尚美！」

聡を遮るようにしてその声が耳に入った。

私を呼ぶ声。

「拓也。」

いつもの笑顔。

拓也は駆け寄ると私の手首をぐっと掴んだ。

「たく、や？」

「今から自販に行くんだけど尚美も一緒に来いよ。」

手首を掴む手に力が入る。

「お前、この前の幼なじみじゃん。」

対して露骨に嫌そうな顔をする聡。

「どうも。先輩。ほら尚美、行くぞ。」

「え？ちよっ、拓也？」

半ば無理矢理手を引つ張られて歩き出す。

拓也の顔にはやっぱり笑顔が貼り付けられていて。

「マナイト！後でメールするから！裕子ちゃんにも伝えといて。」

聡の声を背中に受けて。

私は返事もできずに拓也にただ引つ張られていく。

ぐいぐいと腕が痛い。

「拓也？」

呼んでも振り向いてくれない。

拓也は今どんな表情をしているんだろう。

それすらも分からない。

「ねえ、拓也てば！」

ぐいぐいぐい。

指が手首に食い込む。

生まれる摩擦。

痛い。

「痛、いよ…」

私がそう言つと、ぱつと手が放された。

手首を擦る。

少し赤くなっていた。

「お前さ、俺の言ったこと忘れたの？」

「え…？」

靴箱のすぐ近く。

昼休みはあまり人気が無くひっそりとしている。

「あいつらに近づくなつて。言ったよな？俺。」

くるりとこちらを向いた拓也はもう笑っていない。

その目はスツと細められた。

「そ、そんなの…拓也だつて…」

拓也だつて、柴山さんとずっと一緒にいたじゃない。

「俺が、何だよ。」

「じゃあ拓也は昨日の放課後何してたの？」

「は？」

野球部の掛け声が遠くで小さく聞こえる。

「柴山さんと何があったの？」

「今は柴山は関係な」

「どうして。どうして何も教えてくれないの？」

私の言葉に拓也は眉を寄せる。

「どうして、あの時キスしたの…？」

わからないことばかりなんだよ。

「…それは」

知りたいと思えば思うほど。

不安は募るばかりで。

「…んなの、なんとなくに決まってんじゃん。」

ほむ。

また一つ。

「…そっか…。」

拓也がわからなくなる。

「とにかく、もうあいつらと関わるなよ。」

ぼんと私の頭に手をのせて、一度だけ優しく笑って。

拓也は自販機のある中庭へと走って行ってしまった。

拓也に触られた髪にそっと触れる。

わからない。

わからないけど。

それでもやっぱり

私は拓也が好きなんだよ。

「…ばか。」

私はもう見えない拓也の背中に呟いた。

「ねえ、昨日の見たって本当？」

「本当だつてば。」

ふいに聞こえてきた喋り声。

私は近くの靴箱に静かに身を隠した。

「柴山さん、いい気味よね。男子に色目使つてばつかだったし。」

「確かに。私もあんまり好きじゃなかったんだよね。」

柴山さんの名前にぴくりと反応した。

耳を澄まして次の言葉を待つ。

「じゃあやっぱり木高くんは宮崎さんなのかな。」

二人いるうちの片方が言った。

まさか私の名前が出てくるなんて思いもしなかったから驚いた。

拓也の相手が私。

嬉しいような恥ずかしいような
そんな気持ち。

「んーそれがちょっと違うみたい。」

「え？」

ごくりと

息を呑んだ。

「断られた後に柴山さんが、木高くんが好きなのは本当に宮崎さん
？って聞いたの。」

柴山さんが拓也に。

「木高くんが本当に好きなのは笹塚さんじゃないの？って。」

え？

美奈？

「そしたら木高くん、何も答えなかったのよ。」

「あー笹塚さんか！転校しちゃったけど木高くんと仲良かったもんねえ。」

「そうそう。可愛かったし性格も良かったしね。」

ちらりと話している二人が見えた。

体操服を着ている。

今から部活なのかもしれない。

「じゃあ笹塚さんだ。悪いけど宮崎さんより笹塚さんの方が、正直木高くんに似合ってる。」

その後二人の話題は夏休みの予定へと移り、明るい笑い声と共に中庭の方へと歩いていった。

再び静寂が戻ってくる。

しんと。

夏の喧騒は、
どこか遠くに。

私は、教室に向かってゆっくりと歩き出した。

戻らなきゃ。

もうすぐ午後の補習が始まる。

戻らなきゃ。

戻らなきゃ。

「尚美、ちゃん？」

足を止める。

「やっぱり尚美ちゃんだ。って、どうしたの、泣いてるじゃないか。」

泣いてる？

私、泣いてるの？

「う、うう。。。」

「大丈夫大丈夫。」

ぼんぼんと、優しく頭に手をのせられる。

拓也がしたのと
同じように。

涙が止まらなかった。

原因は、
多分分かってる。

別に、拓也が私を好きだと思っていたわけじゃない。

だけど。

少しは、

少しくらいは可能性があるんじゃないかって。

考えても見なかったんだ。

美奈と拓也なんて。

笑える。

笑いたいのには笑えないけど。

涙が邪魔して。

お似合いの二人。

私なんかよりずっと。

あんだだって違うんだから

柴山さんが私に言う。

赤い目をして。

今の私と同じように。

今、やっとわかったよ。

私も違うんだね。

だって拓也には

美奈がいるじゃない。

「そんな状態じゃ授業無理でしょ。」

優しい、声。

「少し屋上に行こうか。聡も呼んで上げるから。」

どうして聡なのよ。

そう思ったけど言わなかった。

私は祐樹先輩に支えられながら、ゆっくりと屋上へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5682d/>

あなたの隣は私でしょ

2010年10月16日13時30分発行